
アルは今日も旅をする

建野海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルは今日も旅をする

【Nコード】

N9695Z

【作者名】

建野海

【あらすじ】

「マスターは駄目駄目マスターですね。私がしつかりしないと」

「んな事言ったって。お前の面倒見てるの俺なんだから」

東西南を三国に囲まれ、貿易国として栄えるセントール。そこに何でも屋として滞在する旅人フィードと奴隷のアル。

訪れる依頼をこなしていく中で起こる、さまざま出来事が彼らを変えていく。

幾多の人々との出会いや別れ。 依頼を経て得られる経験や成長。

ほのぼのとした日常を過ごしながらも、逃れられない戦いに、やがて彼らは身を投じていくことになる。

始まりの回想

始まりはそう、シンと静まり返った夜の事だった。

冷たく、人気のない地下牢に閉じ込められてもう何時間が経ったのだろう。一度も人が来ていないから、一体今が朝なのか昼なのかもわからない。

さつきからお腹は鳴り続けているけど、そんなことは今までいくらでもあったから気にしない。そもそも、今こんな風になってしまったのも、元を辿ればこの空腹に耐えきれなかった自分がいけなかったのだ。

叔母からの嫌がらせに耐えて、お腹が減るのを我慢して、露店に置いてあった果物なんて盗らなければ、こうして惨めに奴隷になんてなる事はなかった。

暗闇に慣れた目で左肩を見ると、そこには奴隷の証である烙印の紋章がくつきりと刻まれていた。簡易魔法で刻まれた契約の証、人以下である存在の紋章が。

罪を犯した自分を叔母は喜んで引き渡した。そして、売りに出された私はその容姿の珍しさから、あっさりと富裕層の人間に買われる事になった。

そこまではよかった。そう、そこまでは。

案の定というべきか、私の容姿が珍しいのを他の富裕層に自慢したかったのか、私を買った少し小太りな男は私の首に繋がれた鎖を

引いて私を引き連れ回した。周りの人々は私を見るなり、

「ほう、これは珍しい。一体どこで手に入れたので？」

「いやいや、立派な買い物なさりましたね。この者はおいくらでなら譲っていただけますかな？」

「あなたもまた変わった趣味をしていらっしやる。見たところまだ十かそこらの少女ではありませんか。そのような趣味をしていらっしやるとは知りませんでしたな」

などと、私をじろじろと見つめ、奇異なものを見るかのように接した。その中には一つも好印象なものは見られなかった。

私はこの姿に誇りを持っていた。死んだ母が私に残してくれたのがこの容姿だったから、たとえ人とは違って、その事を卑下したことは一度もなかった。

だけど、それでも。見せ物になるのだけは嫌だった。母から譲り受けたこの姿がこんな風にして晒されるのだけは我慢ならなかった。

だから、この時になって私は自分を掴んでいる男に向かって反抗の意思を表した体当たりをした。

しかし、結果は惨敗。男はよろめいただけで、自分に向かって反抗的な態度を取った私に、正確には私の烙印に命じて私を地に這いつくばらせた。

「この、奴隷風情が。そんなナリでも買ってやったというのに、この私に楯突くなんて……。せっかく話の種ができたと思ったが、こ

んな反抗的な奴隷では仕方ない。すぐにでも売りに出すとしよう。
おい！ 誰かこいつを地下牢に閉じ込めておけ。明日には市の売りに出すから傷はつけるなよ！」

そう言つて男に付き従っている数名が私を捕らえて地下牢に閉じ込めた。

そして、それから地下牢の扉が開く事はなかった。

さっきの話を聞くと、私はまた売りに出されるらしい。またあの壇上に上がらされて、買ひ手の奇異なものを見る視線に晒されるかと思うと気が沈んで仕方がなかった。

せめて次を買ひ人はもう少しまともな人であつてほしい。そんなことを考えて身体を丸めて顔を伏せたときだった。

ゴゴゴツ……ガタン

地下牢への扉が開く音が聞こえ、ゆらゆらと揺れる蠟燭の明かりが部屋の奥にある階段の上に見えた。

もしかして、いつの間にか朝になっていたのだろうか？

コツ、コツと石段を歩く足音が周りに反響する。そして、しばらくして灯りとともに現れたのは一人の若い青年だった。彼は地下牢に入っている私を見つけると、

「あれ？ こんなとこに女の子が閉じ込められてるなんて聞いてないぞ」

と一人呟いた。そして私の事をじつと見つめた。

こいつも他の人間と同じか。みんな私のことをじろじろモノみたいに
見て、何が楽しいんだろう？

そう思っていると、

「なあ、お前ここから出たいか？」

と、男が思ってもいない事を言い出した。

「べつに俺はどっちでもいいんだ。まあ、出たかったら面倒見てやるから早く出る。出たくないならそのままここにいろ」

一体何を言っているんだろう？ 私はこの男の言ってる事が理解できなかった。

「ここを出たとしても、どうせ殺されます。だったら私はここに残っています。どうせ……どこに行っても同じですから」

「ふーん。だったら、ここを出ても安全って言ったらどうする？ お前は好きにしていって言われたらどうする？」

「それは……」

問いかけられて私は答えに困った。今まで言われた事をやるだけの生活だったから、自分でどうすればいいかだなんてことは考えた事がなかった。

でも、ここから出て自由になったとして一体自分はなにがしたいの
だろう？ 結局は変わらずに嫌な視線を向けられるのがオチだろ

う。

それならば、どこか遠く、自分が安心して過ごせるような場所に行ってみたい。

「どこか、遠く。私がいても変に思われない場所に行ってみたい」

そう男に伝えた瞬間。目の前にあった鉄格子の扉が強引にこじ開けられた。

「そつか。じゃあ、俺と行こうか」

男の馬鹿力に驚く間もなく、手を引かれ、勢いよく階段を駆け上る。

灯りのある場所に上がると、鉄格子をこじ開けた音が地下から上に漏れていたのか、騒ぎに気がついた人々の走り回る足音が少し遠くから聞こえた。

「マズっ！ ちょっと派手にやりすぎたなあ」

マズいといいながらちつとも不安そうな表情を見せない男をどこか不思議に感じながら見上げていると、私の視線に気がついた男が

「ん？　なんだ、不安なのか。安心しろって、俺がなんとかしてやるから」

「べ、べつに不安に思っていないせん。言いがかりはよしてください」

私の反論が可笑しいのか、男は笑って私の頭を軽く叩いた。明るい場所に出て私の容姿ははっきり見えるようになっていたのに男は

何も言わなかった。

「あ、あの。なんで何も言わないんですか。その……」

灯りに照らされてはつきりと見える白髪に赤眼。これこそが私が奴隷として小太りな男に買われた理由だった。

「いや、べつに姿なんて人それぞれだろ？ 多少驚いたけど、それくらいで変に思う要素はないしな」

「そ、そうなんですか……」

今まで出会った事のある人とはまったく違う反応に私は戸惑ってしまう。

「ああ。そんなんで驚いているようなら俺の秘密なんてもっとすごいぞ。聞いて驚け。実は俺はな……不老なんだ」

それを聞いて私はこの男は頭がおかしいのだと思う事にした。勝手に出てきて勝手に助けて、私が今まで散々蔑まれて奇異の視線に晒されてきたこの容姿についても何も言わないで、拳げ句の果てには自分は不老だという。これをおかしいと思わないでどう思えばいいのだろう。

「ま、普通は信じねーわな。——っと、そろそろ向こうも来るな。俺からあんまり離れないようにして付いてこいよ」

そう言っつて男は私の前に出た。私はこの時そのままここに残るという選択肢もまだ残っていたのに、気づけばいつの間にか男の背を追っていた。

これが、私と旅人フィードの最初の出逢いだった。

酒場にて

この世界、名の付けられていないこの世界には一つの大陸が存在する。

大陸は大きくわけて四つの国が存在し、

東の武の国 ジャン

西の剣の国 フラム

南の知の国 トリア

ジャンは武芸に優れた国。武術や気を扱う人々、それらを学ぶ人で溢れている。

フラムは剣技に優れた国。勇猛果敢な騎士たちが今日も人々を守っている。

トリアは魔術に優れた国。魔術に関する蔵書や、魔術の最先端である学院が存在し、魔術を研究するために訪れる人々も多い。

そして、それら三国に囲まれ貿易国として栄えるのはセントール。各国の情報や特産物などが入り交じり、どの国よりも賑わい、人が行き交う国だ。

一見すると他の三国に比べて武力に劣ると思われるこの国だが、各国から亡命するものが多く、彼らが集まって作った組織があるため、簡単には侵略される心配はない。

そのためか、なんらかの理由で国を追われた亡命者が次々とこの国に流れてきたため、この国は亡益国と揶揄される事もある。

物語は、そんなセントールの西側、剣の国フラムに近い小さな下

町から始まる。

「おいオッサン！　なんか仕事紹介してくれ」

下町にある酒場の扉を勢いよく開いて、一人の青年が中へと入ってきた。まだ日も昇りきっていないこの時間帯では酒場にいる人もまばらであり、彼が勢いよく登場してきても誰も大きな反応を示しはしない。

初めて彼を見た者は何事かと一瞬驚き、しかしいした事ではないと彼の言葉と雰囲気からすぐさま察し、食べかけていたパンに再び手を伸ばす。

この酒場の馴染みの者は最近ここによく顔を出すようになった青年の毎度の行動に呆れ、ため息を吐き、そして店主に同情の眼差しを向ける。

「おい、今うちは営業中だ。仕事欲しけりや食事の一つや二つ頼んでからにしてもらおうか」

顔全体に深く生えた髭に、強面で体格のいい、暗い路地裏で一般人が出会った日には腰を抜かしてしまいそうな風貌をした中年の男性がカウンターの中で木製のグラスを拭いていた。

「そんな堅いこと言わないで紹介してくれよ。俺を路頭に迷わすつもりかよ」

愚痴をこぼしながら、青年はカウンターの一席に座った。

「そうだぜ、レオード。さっさとそいつに仕事でもなんでも紹介し

てつまみ出しちまえ！　こう毎日毎日入り浸られたんじゃ、せつかくの酒がまずくなつて仕方がねえ」

馴染みの客の一人がテーブル席から冗談混じりに文句を言う。

「うるせえ！　おめえだつてこんな日中からろくに働きもしねえでうちに入り浸つてるじゃねえか。おめえとこいつに違いがあるならうちに金を払つてるか払つてないかの違いくらいだ」

すかさずカウンターのなかからレオードが言い返した。その言葉に他の馴染みの客は「まちがいねえ」と頷いた。

もつとも、頷いた彼らも結局のところ同類なのだという事に気がついていないのだが。

「そんじゃ、俺もここに寄付をしますかね。いつも仕事紹介してもらってるし。オッサン、俺アップルパイとラム酒ね」

「このガキ。頼むと言つておいてそいつはうちで一番安い料理とドリンクじゃねーか。どうせだつたらもつと高いもん頼みやがれ！」

「えゝ。だつてオッサンの料理つてそんな上手くないし、せつかく高い金を支払つていいもの頼んで、黒こげになつたもんを食わされちやたまつたもんじゃないからね」

青年の一言にまたしても酒場に笑い声が響き渡る。「そりゃあそうだ」とか「おめえの負けだレオード」と言つた野次が飛び交う。

「くっ……言わせておけば、好き放題言いやがつて。おい、フィード！　俺は昔傭兵ギルドでも名の通つた腕利きの傭兵だったんだ。あんまし馬鹿にしていると痛い目を見る事になるぞ」

フィードと呼ばれた青年はレオードの脅し文句に、

「みんな聞いたか？ ついに出たぞオッサンの謳い文句、傭兵レオード。一体それで今まで何人の女を口説いて相手にされなかった事やら」

その言葉にまたしてもドツとひときわ高い笑い声が上がった。ある者はテーブルをドンドンと勢いよく叩き、ある者は「また始まったよ」とレオードのいつものやりとりに呆れかえる。

この酒場の店主、レオード。彼が言うには彼は昔有名な傭兵ギルドで名のある傭兵だったらしい。その名を聞けば、誰もが恐れかえって彼に道を譲ったし、その任務成功率は相当な高確率だったようだ。

実際、彼の身体には剣で切り刻まれたような痕や、魔法によって傷つけられたような痕もあるので信憑性は高いのだが、なにぶんこんな下町の酒場でそんなことを言っても、相手は酔っぱらいばかり、まともに話を取り合うわけもなく、みんなほらを吹いているのか、さもないれば妄想だと切り捨てていた。

もつとも、彼自身いつからここにいるのか知っている人は少ないし、実際体格の良さから話を聞いた一部の人は実は本当じゃないのだろうかと疑っている。

しかし、彼が戦っている姿など誰も見た事がないので、結局冗談だとしてみんな扱う事にしているのだった。

「お前たち……今日は閉店だ！ おめえらもこんなところで油売ってないでとっとと仕事にでも行ってきやがれ！」

レオードは怒声とともに木樽を酒場の中央へ放り投げた。

さすがにマズいと思ったのか、怒りの矛先を自分に向けられたくないと思い、酒場にいた人々は代金だけ置いてそそくさと外へ出て行ってしまった。

ただ一人フィードを残して。

「オッサンのおかげで他の客はみんな仕事に行つたな。俺も同じように労働に勤しみたいんだけど？」

レオードの怒りもなんのその。気にした様子を一切見せず、フィードはいつもの調子で話を続けた。

いつものことながら、相手のペースに乗せられたことによつて、気がついたレオードは沸き上がる怒りを抑えて、しぶしぶフィードの要求を飲むことにした。

「まったく、お前が来るとうちは商売上がった。頼むから二度とこないでくれ」

「そんなことって、俺が来たときはみんな盛り上がっているじゃないか」

「お前が余計な事ばかり言うからだ！」

カウンターの奥から何枚かの羊皮紙を持ってきたレオードはフィードの目の前に勢いよくそれを叩き付けた。

「ほら、お前が欲しがっている仕事だ。どれでもいいから好きなの

を選べ！ なんなら全部やってもいいんだぞ」

「いや、そこまで欲しいと思っていないから。どれどれ……」

目の前に置かれた羊皮紙に書かれた内容をフィードはじつと見つめた。そこには下町に関する事件や人手の足りない作業の手伝いに関する内容が書かれていた。

「なにに？ 中階層の建築の手伝い。土木作業じゃねえか、これ。嫌だよ、あんな男臭いところにいくなんて」

「仕事を紹介してもらってる立場で文句を言うんじゃない。だいたいお前なんでこんな風に仕事紹介してもらうなんていう形式をとってるんだ？ そこらにいけば仕事なんて溢れるほどあるだろうが」

「うーん。べつにそうしてもいいんだけど、なるべくみんなの手に負えなくて困ってそうな仕事をこなしたいし。せつかく自分にできる事があるならできるやつがそれをやるべきだとは思わない？」

「まあ、そりゃあそうだけだな」

確かにフィードの言った通り、できるやつがやれることをするべきだという考えはレオードにもある。しかし、比較的身分への差別が少ないこのセントールでもやはり格差が存在し、中階層、上階層の人間に比べれば下町の人々は魔術師や傭兵などといったものに依頼を頼む余裕がない。そのため、何か事件が起こったとしても自衛が基本になってしまう。

もつとも、どうしても手に負えないような事件が起これば騎士団や魔術師団に依頼を出すのだが、彼らも下町の人々だけしか被害が

出ていないうちは中々動こうとはしないのだ。中階層、上階層に被害が出てようやく動き出すといった感じである。

だからこそ、今ではすっかりこの下町に馴染んだフィードたちが、初めて下町で起こった事件を手伝い解決し、何も金銭などを要求しなかった際、この町の誰もが彼を疑った。元よりよそ者、しかも亡益国と揶揄されるこの国に腕の立つものが現れたら警戒しない方がおかしい。きっと彼らもどこかの国で何か事件を起こし、亡命してきたのだらうと誰もが思ったのだ。

「ん？ どうしたの、そんなにじつと俺の事見て」

見たところまだ二十にもなっていないなさそうな容貌をしているのに、どこか激戦をくぐり抜けてきたような貫禄も感じる。本人は何も言わないが、やはり訳ありなのだらうとレオードは勝手に考える。

「いや、特に何もない。いいからお前はさっさと仕事を選んで出て行きやがれ」

ぶっきらぼうに言うが、フィードを無理やり追い出すこともなくこうしてわざわざ仕事を紹介しているのは、レオードが彼を信頼しているからだろう。

「それじゃあ、こいつを貰ってくよ。任務成功したら報酬を町長から貰っておいてくれよ。それじゃあ、またな」

「二度と来るな、このくそつたれが」

ひらひらと羊皮紙をはためかせ、フィードは酒場を後にした。そんな彼の背を見送りながらレオードは残った羊皮紙を片付ける。そ

して、それらに一通り目を通したところで気がついた。

（まったく、あの野郎。なんだかんだ言つて一番面倒な仕事を持って行ったじゃねえか。本当に素直じゃないやつだ）

数枚あつた仕事の依頼でフィードが持つて行ったのは今下町を一番騒がせている事件、盗賊による被害防止の依頼だつた。

情けない主

酒場を出たフィードは羊皮紙を上着のポケットに仕舞い、下町をぐるりと周り始めた。

先ほど見た羊皮紙にはここ数日下町を騒がせている盗賊による金品の盗難被害について書かれていた。娯楽や刺激の少ない下町では、ちよつとした事件でさえすぐに噂になる。盗賊が現れ、しかもその事件が連続で何件も起こったとなれば、下町にいる人間の誰もが今ではこの事件について知っていた。

自分が被害に遭わなければ他人のちよつとした不幸なんてものは他の者にとっては話の種にしかない。そのはずだったが、それも昨日の事件によって少々事情が変わった。

昨晩下町の外れにある民家に盗賊が侵入し、侵入した民家の家主が後ろから切られて殺されたのだ。これまでは家主のいない時間帯を狙って金品を奪っていた盗賊だったが、ここに来てボロが出た。

そもそも、野盗のような盗賊ならまだしも、自警団や騎士団がいる都市部で盗賊など滅多に見かけないはずなのだ。地形に詳しくなければ、すぐに足がつくし、下町などの金品を奪ったところでその金額などたかが知れている。しかも殺人を犯してしまつてはいよいよ追いつめられてしまったといえるだろう。これ以上被害が広がるようなら、さすがに騎士団といえど動かざるを得ないだろう。

しかし、騎士団を動かすとなると、それこそ隊によっては法外な金額の謝礼を請求される事もあるため、そうなる前に事件を解決しようとしてフィードは依頼を受けたという事である。

事件のせいか、普段に比べて露店も少なく、人通りもまばらだ。大人はもとより、子供の姿など見つける方が難しい。

「困ったな。事件について話を色々聞きたかったんだけど、こうも人がいないんじゃないかな」

先ほどの酒場に集まっている人に話を聞いておけばよかったと今更後悔するフィード。とはいっても、彼らを追い出したのは彼自身なので自業自得なのだが……。

と、きよろきよろと辺りを見回していると、ドンと軽い衝撃がフィードの腰元に響いた。

「お？」

よく見ると小さな子供が勢いよく走り抜けた際にフィードにぶつかったようだ。普通の人ならばそのように見えただろう。しかし……。

「ほー。俺から金を盗むとはいいい度胸をしてるじゃねーか」

いつの間にか腰に付けていた硬貨袋がなくなっている事に気がついたフィードは、走り去る少年の背を見つめながら呟く。その表情にいつものような笑顔はなく、どこまでも冷めきった表情が浮かんでおり、彼の横をすれ違う者は道をあけるほどの不気味さだった。

「世の中を舐めてると痛い目を見るってことを俺が教えてやるか」

そうしてフィードは少年の背を勢いよく追いかけ始めた。

日が沈み始め、外に出ていた露店が店じまいを始めた頃、路地裏の一角で木箱に腰を預けて息を切らしていた一人の青年がいた。

「く、くそ。あの糞ガキ共。手加減してやっていれば調子に乗りやがって……」

空を仰ぎ、息を整えながら負け惜しみの言葉を吐き出すフィード。そう、結果だけ言ってしまうれば彼は結局金を盗まれたままだった。

あの後、金を奪った少年を追いかけたフィードは行く先々で少年の仲間と思われる別の少年少女たちの妨害工作にあった。時には積み重なった木箱を倒され道を塞いだり、糞の入った小樽を投げつけてきたり、妨害工作に失敗して怪我をしたと思った少女に慌てて声をかけたらナイフで胸元を狙われたりした。最後は正直胸元を擦って危なかったが、それ以外はどうか切り抜けていた。

しかし、途中で少年少女が多数入り混じったせいか、誰が硬貨袋を持っているのかがわからなくなってしまい、結局取り逃がす事になってしまった。

「しまったな……ガキだと思って油断すぎた。こんなことがアルに知れたらまた文句を言われるに違いない」

名目上は自分の奴隷である白髪の少女のことを思い出し、フィードの気分は一気に下降した。ただでさえ毎日小言を言われてうんざりしているのに今回の件がしれたら余計に小言が酷くなるということが容易に想像できたからだった。

仕方なくもう一度少年たちを捜しに行こうと木箱から腰を上げ、前を見たところでフィードはようやく気がついた。自分の前方にフィードをかぶった見慣れた少女がいるということに。

人目を引く赤色の眼にフィードに隠れきれない部分からはみ出す白髪。アルビノと呼ばれる種の少女がそこには立っていた。

「さて、さつきからぶつぶつと独り言を呟くマスターに私はどう反応したらいいかわからなかったので、こうしてずっと待たせてもらいましたが、私に知られるとマズい話でもあるんですか？ マスター」

突然の少女の登場に動揺を隠せないフィード。少女のこめかみにはうつすらと筋が張っている。

「よ、ようアル。こんなところで会うなんて奇遇だな」

「奇遇なんて白々しいですよマスター。私に食材の買い出しを頼んだのマスターじゃないですか。酒場に行っているって聞いていたので行ってみればレオードさんにマスターはとくに出て行ったと言われましたし、荷物を置いて探しに出てみればこんなところで倒れ込んでますし。それにまた、私に知られたらいけないような事を起こしてるみたいですし。一体今度はなにをやらかしたんですか」

「今度はって……毎回何か起こしているようにいうんじゃないよ」

「マスターが動いて何もなかった事の方が少ないんですからしょうがないじゃないですか。私のときだって……」

「そう言われてもな…… 実際降り掛かる火の粉を払ってるだけだし」

「そういうことしてるから厄介ごとに巻き込まれるんですよ」

ため息を吐き、アルはフィードの傍に近づいた。そして、

「それで、結局今回は何をしたんですか。マスターが色々な面で駄目な人だと言う事は今まで一緒に行動してきてもうわかっていますから、早く言った方がマスターのためですよ」

身を乗り出し、問いつめるアルにフィードはとうとう根負けして、

「いや、実はな……」

と先ほど起こった事を説明しだした。

「ハア。もうホントに私のマスターはどうしようもないです。本当に駄目駄目です。何でこんなのが私のマスターなんでしょう。いつその事私がマスターになりたいくらいです」

アルと合流したフィードは下宿先である宿に帰り、一階の食事場で夕食をとっていた。

「まあ、まあ。アルちゃんもその辺にしておきなよ。フィードさんだって悪気があってお金を奪われたわけじゃないんだから」

温かな湯気の立つ野菜スープを運びながら、中年の女性がアルに口を挟む。

「それは当たり前ですグリーンさん。悪気があつてお金を盗られるなんてことがあつたら最悪です」

グリーンと呼ばれた中年の女性は、そんなアルに苦笑しながらフィードとアルの前にスーパを置いた。

「でもアルちゃんはフィードさんに養ってもらっているんだろう？ だったら文句を言っちゃ行けないよ。こういった時に助け合つのが家族つてもんじゃないのかい？」

グリーンは背中まである長いくせ毛をなびかせて言う。アルもグリンの言っていることは内心理解しているからか、つい口ごもってしまった。

と、ここまで来てようやくそれまで黙っていた話の当事者が話した。

「本当に悪かったな、アル。それとグリーンさんもなんだかすいません。氣を使わせたみたいで」

「いいんだよ。あんたが悪い奴じゃないってことは今までの下町での活躍を見てればわかるからね。それにアルちゃんのこと。あたしは奴隷にこれだけコケにされる主人つても見たことなかったしね」

グリンのその言葉にフィードは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「それで、お金の事はともかく、今回の依頼つて言うのはやっぱりあれかい？」

フィードが酒場を通じて下町のやつかいな依頼を受けている事を知っているグリーンは気になっていたことを尋ねた。

「ええ。おそらくグリーンさんの想像している通りです。盗賊の被害の防止、もしくは盗賊の捕縛ですよ」

「やっぱりそうなんだねー。ここ最近この辺りもその件で騒がしくなっていたし、昨日なんて死人が出たらしいからね。そろそろ依頼が出る頃だろうと思ったよ。うちの騎士団は下町の為になんて動いちやくないし。ここがフラムだったら話は違ったんだろうけどね」

フラムという名前を聞いて一瞬フィードの表情に影が差した。しかし、それに二人が気がつく前にいつもの表情に戻ったため、誰もフィードの変化に気づく事はなかった。

「そうですね。フラムなら騎士団は身分など関係なく誰にでも救いの手を差し伸べますからね。一番治安がいい国も実際あそこですし」

「そうみたいだねえ。特にここ最近出てきた何番隊だったかの副隊長さん。たしかリオネとかいったかしら。女性なのに他の隊の隊長と変わらないくらい強いみたいだね。」

しかも、あたしたちみたいな下町の人にも救いの手を何度も差し伸べてくれているみたいだし。本当にあんな人がうちの国にもいてくれたらいいんだけどね」

「そうですね。まあ、彼女みたいな人の代わりにならないかもしれないですけど、俺も頑張らせてもらいますよ」

「せいぜい稼いできてもらうよ。お金をなくしたからって家賃を見逃すほどあたしは甘くないよ」

「依頼を早いとこなさないとな」と気を落とすフィード。アルはその横でのんびりと野菜スープを口にしていた。

一日の始まり

翌日、いつものようにベッドの上で目が覚めたフィードは違和感を感じていた。そして、その理由はすぐにわかった。

「おい、アル。お前俺のベッドに入るなって何度も言ってるだろうが」

上半身を起き上がらせたフィードのすぐ横には、寒そうに身体を震わせてベッドの上で丸まっているアルの姿あった。

「マスター、寒いです。早く毛布をかけてください」

一ミリも身体を動かすことなく、アルは言う。

「あのなあ、わざわざお前のためにもう一つベッドを用意してあるのになんで毎回毎回俺の方のベッドに入ってくるんだよ」

何度言っても自分の言うことを聞かないアルに呆れながらフィードはベッドから降り、グリーンによって洗われて綺麗になった赤色の上着を羽織る。その際、アルの身体に毛布を覆い被せて寒くないようにした。

「それじゃあ、俺は今日も盗賊の方の事件を調べて来るから、お前は大人しくグリーンさんの言う事を聞いておけよ」

それだけを言い残してフィードは部屋を出て行った。

ボタンと扉の閉まる音が聞こえ、しばらくしてアルは毛布を身体

から剥がして起き上がった。元々アルにとってフィードと共にいる事自体に意味があるのであって、フィードがいなくなってしまうってベッドにいる意味もないのだ。

フィードとアルの関係は少々、というよりかなり特殊だ。

一般的には奴隷と主人という関係なのだが、実際に彼らが話している姿を見て、すぐにそうだと気がつく人は少ない。

そもそも、奴隷というのは主人に思考、言動、最終的には命までも握られている状態である。奴隷の主人は彼らの命を金で買っているのだ。主人が気に入らないと判断して、奴隷の身体に刻まれていく烙印に命じれば、その命を絶つことなんてことは訳もない。

そのため、一般的な奴隷は主人の顔色を伺い、媚びへつらっている者が多い。もちろん例外はあるが、アルとフィードはその中でもまた例外中の例外だろう。昨日の一件でもそうだが、奴隷が主人を罵倒するなど特殊な趣味があるもの以外では普通あり得ないからだ。

かといって、アルがフィードに対して常日頃そのような態度であるかというところでもない。普段はフィードがアルに対してふざけた態度を取っているため、アルの態度も必然冷たいものになるのだが、荒事などの際はフィードは普段から想像もできな程真面目な態度をとるようになる。そのときはアルもふざけた態度を取る事もなく、いつもとは違った対応を見せるのだ。

しかし、そんな事態はそこまで多くないので、結局冷たい態度でフィードに接する事が多くなってしまいうアルであった。

（全く、私があなただの傍にいないと眠れない理由をもう少し考えてくれてもいいと思うんですが。いえ、これは私のわがままですね。

奴隷の身分で十分な衣食住を提供してもらって、その上言論の自由まで。

…… 思えばマスターに何かを強要されたり抑圧されたことなんて今まで一度もありませんでしたね。本人も便宜上奴隷という立場になっってしまうって言うてましたし）

かつてフィードに奴隷という立場から解放され、その後自ら望んで彼の旅に同行するようになってはや数ヶ月が経った。

普段からキツイ物言いをし、冷たい態度を貫き、外敵から身を守っているがその実信頼できる相手がいないからそのような態度になっってしまったことをアルは自覚していた。だからこそ、今アルが一番信頼できる自分の主、フィードの傍を一緒にいるときは離れないようにしているのだ。

また、無自覚、自覚があるかどうかは別として、アルは常にフィードの姿を目で追っている。もっともアルのその行動にフィードが気がついていてどうかはわからないが。

アルもまた羽毛でできた温かな上着を羽織ると、部屋の換気をするために窓を開け放つ。部屋の床に溜まったホコリがふわりと宙に舞い上がり、外の新鮮な空気と入れ替わっていく。

アルは急に舞い上がったホコリにコンと少し咳き込み、口元を押さえながら部屋を出た。

（しばらくは窓を開けて換気をしておきましょう。だいぶ中の空気が淀んでいましたから）

そうしてアルは宿の二階に存在する自分たちの部屋を後にして一階の食事場に降りて行った。

「おや、アルちゃん。今日は少し遅めの起床だね。フィードさんはもう出かけちゃったよ」

宿に泊まっている他のお客が食べた食事を片付けながら、グリーンが明るい笑顔とともにアルに声をかけた。

「おはようございます、グリーンさん。マスターが出かけた事なら知っています。今日も……置いて行かれたので」

しょんぼりと肩を落しながらアルは答える。その言葉はアルの奇抜な容姿と、親に見放されて落ち込む子供のような姿とのギャップからグリーンやその場にいた者の母性本能を激しくくすぐった。

「もう、あたしがこの子の親なら絶対に置いて行ったりなんてしないのね！ フィードさんも色々と考えてアルちゃんをここに置いて行っているんだろうけど、まったくこれじゃあこの子がかわいそうだよ。安心おし、今日フィードさんが帰ってきたらあたしが一言言っておいてあげるから」

そうだ、そうだ！ と周りにいる宿泊客も同意の声を上げる。もっとも彼らの中でフィードの顔を知っている者はほとんどいないし、アルが奴隷だと知っているものもグリーン以外にはいない。変わった容姿をした異国人とその保護者である旅人とぐらいの知識しかないのだ。

そのせいか、フィードによく宿に置き去りにされ、グリンの仕事の手伝いをしていたアルはその容姿とフィード以外には余り話さない事から自然と寡黙で変わった容姿の可愛らしい少女と周りの人間から評価をくだされていたのだ。

そして、一度決まった評価というのは中々変わるものではなく、

宿に長い間滞在しているという事もあって、宿に泊まりにきた客や食事を取りにきた客からアルは新しく入った住み込みの可愛らしい少女と認識され、いつの間にかこの宿の看板娘としての地位を確立しつつあったのだった。

「グリーンさん、どうもありがとうございます。それで今日は何を手伝えればいいんですか？」

ペコリと腰を曲げてグリーンにお礼を言うアル。この宿に滞在して、もうそれなりに月日が経とうとしている。その際、フィードに置いて行かれる事の方が多かったアルは自主的にグリーンの手伝いを始めたのだった。

最初はお客にそんな事はさせられないと断っていたグリーンだったが、フィードもアルのやる事がないとわかっていたため、料理などを覚えさせるという理由でグリーンにアルの手伝いを認めてほしいと頼んだのだ。

結局、二人のお願いに根負けしたのか、グリーンはアルの手伝いを認める事にしたのだった。

「そうだね。ひとまず料理の材料が朝に使って少し足りなくなってきたから買い出しに行ってもらえるかい？　その後の指示は帰ってからまたするから」

「わかりました。それでは買い出しに行ってきます」

カウンターの隅に置いてあるメモが書かれた用紙をグリーンはアルに手渡すと、そのまま他のお客の料理を作り厨房へと引っ込んでしまった。

アルは受け取った紙に書かれた内容をじっくりと見て、それを片手で握りしめたまま上着についているフードを深くかぶる。

（必要なのは鳥の胸肉とあとは玉葱、それからジャガイモですね。これなら一度の買い出しで済みそうです）

アルは必要な食材を記憶し、メモを空いているポケットに入れ、カウンターの中に入り、置いてあった買い出し用の硬貨袋を持ち、宿を出ていったのだった。

買い出し

外に出るといつもより遅い時間に起きたせいか、多くの人が道を行き交っていた。露店に商品を並べ、商品を売り込むために声を張り上げる店員や、子馬に荷物を引かせる郵送屋、それらを眺めながら何を買おうかと悩んでいる一般人。多種多様な人々がいた。

日中という事もあってアルがフードをかぶっていても特に誰も不審に思う事はなかった。これが小汚い上着であれば物乞いなどと勘違いして怪しまれたかもしれないが、フィードに買ってもらった綺麗な上着で特に汚す事もなく大切に扱っていたので新品と遜色ないほど綺麗さを保っていた。

もちろん、それだけが不審に思われない理由ではない。最近セントールには厳しい日射しが照りつけており、一足早い夏季が訪れているのではないかと人々の間で噂になっていた。そのため、アル以外にも上着に付けられているフードをかぶる人や、藁で編まれた帽子をかぶる人、他にも日陰で休む人の姿も数多く見受けられる。

これが実質アルが疑われない理由の大半だろう。

大勢の人波をかき分けながらアルはいつもグリーンが肉を仕入れている精肉店へと歩いて行った。

「あ、あの。鳥の胸肉を……くれませんか」

精肉店についたアルはいつものフィードに話しかけているような毅然とした態度ではなく、下手をすれば町の雑多が鳴らす音にかき消されてしまうほど小さくか細い声で店主に話しかけた。

「ん？ なんだい嬢ちゃん。買い物か？ 鳥の胸肉が欲しいのか、いくつだい？」

店主はアルに向かってできるだけ優しく声をかけた。少年少女のお使いに慣れているのか、どこか相手を気遣った話し方は淀みない。

「えっと……これくらいなんですけど」

アルは持っていたメモ用紙を店主に見せた。店主はそれを見ると、

「おや？ もしかしてあんたグリーンさんのところにいる嬢ちゃんかい？」

思いがけない店主の言葉にアルは少し面食らった。

「はい、そうですけど……」

自分の知らない相手が自分の事を知っているという事実にはアルは警戒心を抱いて身構えた。しかし、そんなアルを見て店主はケラケラと笑い声を上げる。

「いやいや、そんな警戒しなくても大丈夫だよ。実は少し前にグリーンさんの所に食事をしに行った時に君の事を見かけてね。噂の可愛らしいお嬢さんがどれほどか確かめに行こうって友人に誘われて行ったのだけだね。」

そうしたら見かけない白髪の小さな子供がたどしく料理を運んでいる。しかもそんじょそこらじゃお目にかかれなような可愛いさときた。

それに、後から聞いた話じゃ君の保護者はあのフィードだっていうじゃないか。実は前に荷物の護衛を彼に頼んでトリアの方の村に

行つた事があつてね。その時野盗に襲われたんだが、彼は難なくそれを追い払つてね。あれは見ていて気持ちのいいものだったな。

まあ、そう言つた訳で私は少々君たちの事を知ってるんだよ。もっともそれは私だけに限らず、下町の人間の大半はもう彼の事を知っていると思うよ。良くも悪くも彼は目立つからね」

長々と続ける店主の話に一度も口を挟む事をなくアルは黙って聞いていた。確かに、フィードが荷物の輸送の護衛をするといつて数日アルの元を離れた事はこれまで何度もあつたため、店主の話は信用できる。問題はそんな事よりも自分とフィードが自分たちが思っている以上に下町の人間に覚えられているという事だった。

「そんなに私たちは有名なのですか？」

「そうだねえ。ただでさえこの下町というところに住んでいる人々は刺激に飢えているからね。ちょっとした話題でさえここじゃすぐに広まるよ。それにさっきも言つたけれど、君たちは良くも悪くも目立つからね……」

良い方はともかく、悪い方で目立つのは願ひ下げたいのだが、その悪い方で目立っているのは少なくともアルではないため、今すぐにはどうすることもできないのだった。

「ありがとうございます。以後気をつけるように言っておきます」

店主が用意した肉の入った包みを受け取り、代金を支払う際にアルはそう伝える。店主は何の事だか分からないのか首を傾げていた。

その後も残りの材料を買う時に、店員や店主から「グリーンさんの所のかわいいお嬢さん」と言われ、じろじろと眺められ、果てはフ

ードを取られて頭を撫でられる始末だ。さすがに、それについては怒ったアルだったが、怒り方も強く言えないため、黙ったままじつと不満げに相手を睨みつけるだけになり、結局それもまたかわいいと評される要因の一つになるのだった。

「はあ、ただ買い出しに出かけたただけなのに疲れました……」

両手いっぱいになった買い出し品を抱えながらアルはグリンの元へと向かっていた。道中で何度か見知らぬ人々に声をかけられて困ったが、特に何かをされる訳でもなかったので、よかったのだが。

「そもそも、みんな私が奴隷だって事知らないからあんな風に気軽に声をかけてくれるんですね」

自分の肩に刻まれている烙印を一瞥してアルは独り言を呟く。

「実際に知っていても普通にしてくれるグリンさんはきっと珍しい人なんだろうね。あれを普通だと思いたいのは私の希望でしょうし」

実際、このセントールに来てから、今までのように外見で差別されるような事は余りなかった。物珍しそうに皆に見られるのは変わりないが、それで気味悪がられたりすることはほとんどない。他国との貿易をしているこの国だからこそ、アルのような変わり種の間を見る機会は少くないのだろう。

しかし、奴隷となるとまた扱いは変わって来る。アルを最初に買った主とまではいかないものの、少なくとも今のアルとフィードのような関係性は見られない。奴隷は主人を立て、彼らの言う事に従順でなければならない。

そして、彼らに対する一般人の対応もまた粗雑だ。奴隷が粗相をし、それが気に入らなければ乱暴な扱いを受けて当たり前。もちろん、奴隷は主の所有物なのでそれで怪我をした場合は主にそれ相応の金を支払わなければならないが、結局全て金で解決できてしまう。

（……やっぱりこの世界はお金が全てなんだろうか）

そう思い、すぐさま否定をする。それは彼女自身を助け、面倒を見てくれているフィードに対する侮辱だ。

アルは彼の屈託のない子供のような明るい表情を思い出し、

（とはいっても私たちの場合はマスターに面倒を見てもらっているのか、私が見ているのかどっちなのかわかりませんけど）

やれやれと思っていると、気が逸れていたせいか、前を歩く子供にぶつかってしまった。

「うわっ！」

「あっ……」

アルと同じようにフィードをかぶっていた少年が持っていた硬貨袋を落とし、アルも持っていた材料を地面に落としてしまう。

慌てて落ちた材料を拾うアル。幸い、材料は包みに包まれていたため、汚れずにすんだ。そして、アルの足下に落ちた相手の硬貨袋を拾って手渡そうとして気づく。

（これ……マスターの硬貨袋）

フィードがこれまで使っていた硬貨袋がアルの手元にあった。普

通の硬貨袋であれば気づかなかったが、アルは何度かフィードから買い出しを頼まれてこの硬貨袋を使った事があったのだ。そして、それがフィードのだと気づく決定的な要因となったのは、一度袋の底が抜けた時にアルが縫って直した痕が残っていたからだ。

自分で縫ったものを忘れるほどアルも子供ではない。おそらく、この少年が昨日フィードから硬貨袋を盗んだ少年なのだろう。

そう理解するとアルは手にした硬貨袋をギュツと握りしめて目の前にいる少年を睨みつけた。少年の方もアルが硬貨袋に関して何か気づいたと悟ったのか、徐々に距離を取り、恨めし気に一瞥するとその場から逃げ出してしまった。

「まっ……」

静止の言葉をかける間もなく少年の姿はその場から消えた。アルは手にした硬貨袋と材料を何度も見て、何事もなくすんでよかったと安堵するのだった。

（マスターの硬貨袋も戻ってきましたし、これで今月の家賃も払えます。本当に世話が焼けます。この事を話したらマスターの事ですからきつと褒めてくれますよね……）

フィードに優しく褒められることを想像すると自然と緩む頬を抑える事ができず、終始笑顔のままアルはグリンの元へと歩いて行くのだった。

下調べ

アルが買い出しを終え、グリンの元に向かっている頃、フィードは下町での聞き込みを行っていた。一昨日まで連続で起こっていた盗賊の犯行は何故か昨日は起こらなかった。

「あれじゃねえか。人を殺してビビっちまうような小心者だったんだろ。実際盗られたものもそこまで高価なもんじゃないって聞けぞ。だいたいこんな下町にそんな高価な金品があるわけねーだろうが」

けだるげに答えるのはフィードより頭一つ低い青年。栗色の髪に緑色の瞳。年はもう20を超えているのだが、身長が同年代の者に比べて低い。そのため、年齢よりも幼く見られるのが悩みである青年だ。

「そう思うか？ でも昨日はたまたま現れなかったただけかもしれないだろ。そうやって油断させておいてっていう手かもしれないと思うぞクルス」

クルスと呼ばれた青年は頭をかき、まじめに考えようとするがどうにも落ち着かない。彼はこのように考えるよりも身体を動かす方が得意なのだ。

「まあ、そうかもしれないけどよ。第一なんだってここなんだ？ そりゃ、フラムでやるよりかセントールみたいな貿易国での盗みの方がリスクも低いし、やりやすいかもしれないけどよ。わざわざ都市部に来なくなったらフラムの端にあるような村に盗みに入った方がもっと金も入るし、楽だと思っただけだな」

と、一般人にあるまじき過激な発言をするクルス。こんな事を言っているが、実際彼は盗みを働いた事など一度もない。本人曰く言うだけなら自由という考えに基づいての事だった。

「確かに。それとも、ここじゃないといけない何かがあったのかもしれないってことも」

口元に手を置き、フィードは熟考する。そもそも、ここ最近特に大きな事件のなかった下町で何故急に盗賊が出るようになったのか、それが問題だ。一番に考えられるのは亡命者の存在。この国が他国からの亡命者を暗黙の了解で受け入れているのは周知の事実だ。事情を知らない亡命者が金品欲しさから金を盗み逃げ回っているというのが現状一番考えられる線だろう。

しかし、どうにも腑に落ちない。そもそも亡命をするなら余程の事がない限り事前に下準備をして来る場合が多いはずだ。他国の権力者で、その存在が高位であればあるほどこの国の権力者への根回しをしているはずだからだ。

それに、それほどの権力者でもただの富裕層であるのならば、まず盗みになど入らない。それは彼らの持つ意味のないプライドが大抵の場合は障害になり、行動に移せないし、人を殺した場合は後ろ盾がないので良心の呵責と罪悪感から普通にしていられないからだ。

となると、この場合は権力者であるかどうかは置いておいて、金銭に余裕がなく、事前に計画をしてなく突発的な結果から亡命する事になった亡命者でそれなりに頭も回る相手だと考えた方がいいだろう。

相手の頭が回るとフィードが考えたのはそれなりに日数が経ち、毎日犯行を行っているにもかかわらず、相手の特徴が少しも分かっていないという現状を鑑みての事だった。

「これはだいぶめんどくさそうだな」

事態が思った以上荷厄介であるという事によやく気がついたフ
イードは思わず愚痴をこぼした。

「おいおい、しっかりしてくれよ。お前にどうにかできない問題だ
ったら俺たちは特に役に立たない騎士団たちに問題解決の要請を
ださなくちゃいけないんだぜ。あいつ等に金を払うくらいだったら
パーツと酒場で飲み食いした方がまだマシだぜ」

両手を大きく広げ、金をばらまく仕草をするクルス。その言葉の
端々に騎士団に対する嫌悪感がにじみ出ていた。

「お前、相変わらず騎士団が嫌いなんだな」

思わずフイードは口を挟んだ。

「あつたりまえじゃねーか。あいつらが俺たちにしてくれたことな
んて糞みてーなもんだぞ。大雨で街が浸水した時も、俺たちが必死
に土嚢を積んでる中、酒場でただ酒を飲んでいくくらいで、終わっ
てみれば派遣要請をした分の謝礼を寄越せとか、殺人鬼の亡命者が
下町をうろついてた時に要請してみれば、殺人鬼に鉢合わせしてビ
ビって逃げ出す始末。」

それでいて金は要求する。中にはまともな奴もいるけど大半の騎
士隊はそんな奴らばかりだ。これでどうやって好きになれって言う
んだよ」

憤りを隠すことなく、心に溜まっているものを思いっきり吐き出
すクルス。その大きな声に驚いたのか、通りを歩く他の人々はビク
リと一瞬身を震わせたが、誰も彼を注意することなくその場を立ち

去る。

言葉には出さないが、他の下町の人々も彼と同じような考えなのだろう。

「だからさ、俺たちはお前が来てくれて本当に感謝してるんだよ。腕は立つのに全然金銭を要求したりしねーし。俺たちの事を下に扱ったりしないでいてくれるしさ。なんだかんだ困ってたら助けてくれるのはお前くらいだよ。

だから俺は今回の件もお前がどうにかしてくれるって信じてる。それはきつと他の下町の奴らも一緒だ。だから、みんなお前が今までどんな風に生きていたか聞かないし、興味もない」

真っすぐな眼差しでフィードを見据えるクルス。その視線にフィードは自分の視線を交わらせることなく、

「いいのか？ そんな事言っているといざ事が起こった時に後悔するぞ」

「そんなときはおれや下町の奴らの見る目がなかったってことだ。だいたいお前はそんなことしねーよ」

「どこからくるんだ、その根拠は」

肩をすくめてフィードは呆れる。

「強いて言えば……勘？ 他にも理由はあるけどな」

「勘って……一応お前ここの地区の次期町長だろうが。そんなあやふやなもん信じるなよ。で、他の理由って言うのは？」

「色々あるけど、一つあげるならアルちゃんに対するお前の態度だな。他人に対してあれだけ優しくできる奴が大それた事件とか起こすわけないだろ。それが奴隷ならなおさら……な」

クルスの思いがけない言葉にフィードの視線が鋭くなる。

「お前、それをどこで……」

しかし、フィードの鋭い視線を飄々と受け流してクルスは答える。

「そりゃ、お前。これだけ長い間この町に滞在してればそれくらいの事は分かる奴の一人や二人出て来るさ。まあ、この事を知ってるのは俺も含めて数人程度だから安心しろって。べつに言いふらしたりしねえからさ」

その言葉の真意を探ろうとしたフィードだが、どうやら言葉通りの意味と受け取ってもいいようだ。自分と一緒にいる以上、周りで起こる騒ぎになるべくアルを巻き込まないように心がけている。グリンの元に預けているのもそう言った考えがあるからだ。

だからこそ、今のようにクルスがアルの素性を知って、それが公になったときの彼女への被害はかなりのものになるだろう。

一部の人は理解を示してくれるかもしれないが、ほとんどの人は態度を変えるだろう。まだどの国でも奴隷というもののへの差別的扱いは根深く存在しているのだ。

「ならいい。お前を信用する」

「さすがフィード。下町の何でも屋！」

ドンドンと肩を叩くクルスの腕をフィードはうつとうしそくに振

り払い、

「それじゃあ、なるべく早く問題を解決するよ。みんな迷惑しているみたいだからな」

「おう、よろしく頼むぜ！」

クルスと別れて再び下町をぶらつくフィード。問題を解決するための糸口はある程度掴めていた。この手の依頼はフィードにとって初めてではないのだ。

「さて、それじゃあ次の被害が出る前に犯人を捕まえるとするか」

そうしてフィードはある人物を探し始めた。

その相手はフィードが昨日財布を盗まれた少年だった。

捕われたアル

材料をグリンの元に届けたアルは二階に上がる。被っていたフー
ドを脱ぎ、換気するために開けていた窓を閉め、その後一階に下り
ていった。

一階に降りると、そこには焼きたてのパンをバスケットに入れて
運ぶグリンの姿があった。

「お使いご苦労様アルちゃん」

労うグリンにアルは、

「いえ、これくらいできて当然です。私ももう『子供』じゃありま
せんし」

さも当然のように答える。やたらと「子供」という部分を強調し
ているが、本人は子供扱いされるのがよほど嫌なのだろう。

「そうなの？　せっかくお使いに行ってくれたお礼に焼きたてのク
ッキーを食べてもらおうと思ったのに……。子供じゃないのならア
ルちゃんはいらないわね」

アルが反応する事を分かっているようにあえてグリンは挑発的な態度を
とる。アルは甘いものが好きなのだ。

「そ、そうですね。私は子供じゃないので、そんな……甘いものな
んて……」

フィードがこの場にいたのなら「お前なに变な意地張ってるんだよ。いつも食べてるだろ」とツツコンであとでアルに怒られているのだが、当の本人は今ここにいないため、話が進まない。

グリーンもアルが甘いものを食べるのが好きだと分かってやっている。元々帰ってきたアルとグリンの二人で食べようと思ってクッキーを焼いていたのだ。ここでアルが意地を張り続けて食べないなんていうことになる、グリーン一人で全て食べるには少々量が多いため、食事を取りにきた宿泊客にサービスとして出す事になってしまふ。

さすがにそれはもったいないかなと思っているグリーンなので、結局今回はアルが折れることで話は終わるのだ。

そのアルはというと、甘いものを我慢する「大人」というプライドと、好きなものを好きなだけ食べたいという「子供」との二つの間で激しく心が揺れ動いていた。

（くっ！ グリンさんは私が甘いものが好きだと知っているはずなのに……。いえ、知っているからこそ、こんな風に意地の悪いことをするのですね）

グリンの精神攻撃に必死に耐えていたアルだったが、厨房にある釜から漂うクッキーの甘い香りを嗅ぎ、とうとう折れてしまった。

「食べます。クッキー食べます……」

自分が必死に強調していた「大人」の面をあっさりと覆されて悔しいのか、アルはプルプルと小刻みに肩を震わせていた。

そんなアルの様子が面白いのか、グリーンは口元を抑えて必死に笑

いを堪えていた。

「まあまあ、子供は素直が一番だよ、アルちゃん」

そう言つて皿に大量のクッキーを乗せてアルの元へ持つて来る。

「ほら、焼きたてのうちに食べておくれ」

アルは受け取った皿を手に取り、空いている席に座り、甘く香りのよいクッキーをじつと見つめていた。

（むむむ。これはおいしそうです。クッキーの上にうつすらと蜂蜜が塗つてあつて、それが香りを更に引き立てています）

おずおずとクッキーに手を伸ばしてクッキーの一つを掴んだアル。ゆっくりとそれを口元に運び、一口。深く味わうように口にしたクッキーの欠片をよく咀嚼し、原型を失ったそれを飲み込む。

「おいしい。おいしい……です」

一口食べてすぐにアルの表情が変わった。パツと表情が明るくなり、次から次へとクッキーを手で掴み、口へと運んで行つた。

「おやおや、そんなに急がなくてもクッキーは逃げて行かないよ」

飲み物を取りに厨房の中に入りながら、グリーンがアルに注意する。しかし、アルは食べる事に夢中なのか、グリーンの声が届いていないようだった。

やがて、グリーンが持つてきた飲み物を手渡す頃には皿の上には何

も残っていなかった。結構な量、そもそもグリーンとアルの二人で食べる量だったのだが、結局アル一人で食べてしまった。

グリーンが二人分の飲み物を持ってきた事でようやくアルも二人でクッキーを食べるつもりだったということに気がついたアルは、

「すみません……私、一人で食べちゃいました」

意地汚さからの羞恥や、食べる事に夢中だった姿を晒していた事からか、アルは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「いいんだよ。あれだけ喜んで食べてくれたのなら作ったかいがあったってmondだよ。気にしないでおくれ」

「でも、グリーンさんも一緒に食べるつもりで作ってくれていたのに」

申し訳ないと思っているのか次第に声の小さくなっていくアルに、

「いいんだよ。私の分はなくなっただけどまだ作っていないフィードさんの分が残っているからね」

意地の悪い笑みを浮かべ、グリーンはアルの肩を叩いた。それで、アルもグリーの言わんとしている事を理解した。

「はい、マスターには内緒ですね」

親しいものにだけ見せる笑顔でアルは元気よく答えた。女二人だけのお茶会は、穏やかな時間と共に過ぎて行った。

突発的なお茶会を終え、グリーンが厨房の奥で溜まっている洗い物を片付け、アルは食事場の掃除をしていた。手にした簞で床に溜まったホコリを隅に追いやり、それを一ヶ所に集める。その後、集めたホコリを外に掃き捨てる。

「これで、一段落です」

自分のやる事を終えて満足そうにするアル。外はもう昼を過ぎているせいか、日射しが更にキツくなっていた。澄み渡った青空が真上に広がり、下町の通りを心地よい風が吹き抜けていた。

（今日もいい天気です。後はマスターが頑張って依頼を片付けてくれれば問題ありません）

穏やかな天候とは打って変わって通りを歩く人の様子はどこかぎこちない。連日の盗賊騒ぎ、特に一昨日の殺人が影響しているのだろう。

と、通りを歩く人々に目を向けていると、アルは視界の端に今朝出会った少年の姿を見つけた。

（あれは……マスターの硬貨袋を持っていた）

少年はじつとこっちを見つめていたが、やがてそっぽを向いて路地裏に向けて歩き出した。

「待つて……」

アルは持っていた簞を放り出してすぐさま少年の後を追いかけて始めた。何故、と問われるとアル以外には答えられないだろう。少年

がアルを見ていた瞳がどこかもの悲し気で、追いつめられた様子に見えたからだ。

それはかつてアルが叔母の元で生活していて、盗みを働く直前までしていた様子によく似ていた。だからこそ、アルは少年の事が気になり、何を思う訳でもなく、その背を追いかけたのだった。

日の当たらない路地裏を少年は自分の庭を歩くように進んで行く。アルは少年から離されないようにするので精一杯だ。

異臭のする路地裏。浮浪者が建物に背をもたれている。アルは得体の知れない恐怖と不安から周りに視線を映さないようにして少年の姿だけを追いかけた。

やがて、路地裏の一角にある古ぼけた建物の中に少年は入って行った。

（ここは、どこでしょう。一体私はどこまで来たんでしょう）

少年を追いかける事だけに集中していたせいか、アルは今自分がどこにいるのかもわからなくなってしまった。唯一道を知っている少年は目の前にある建物の中に入ってしまった。出てこない。

このままここにいってもしょうがないと悟ったアルは、少年の入って行った建物に入る事に決めた。

ほとんど錆びている扉に手をかけ、静かに扉を開ける。光の入っていない室内は薄暗くひんやりとした空気が漂っていた。一歩、一歩と足場を確認しながらアルは進んで行く。次第に暗闇に目が慣れてきた。周りを見回して室内の内装を見た限りでは、どうやらここは酒場の跡地のようだった。

と、不意に部屋の隅で何か動くものをアルは見つけた。先ほどの少年だろうか？ そう思っただけで急いで近づく。

「あ、あの！」

いつもより少しだけ大きな声で話しかけるアル。しかし、そこにいたのは先ほどの少年ではなかった。

重しのついた鎖に繋がれ、涙で頬を濡らしている少年少女がそこにいた。小汚い衣装に身を包み、破れた衣装から見える肌は殴られたのが青くなっていた。その姿を見てアルはゾツとした。

（これは、これは……。市に出される前の奴隷です）

アルはかつての自分の姿と少年少女たちの姿を重ねる。個人所有の奴隷となる前は、彼らは魔法で刻まれた烙印を押されず、買い手が見つかるまではこのように鎖で繋がれて逃げられないようにさせられるのだ。

（しかし、何故こんなところにこんなに多くの奴隷がいるのですか？　これだけ多くの子供がいなくなれば誰か気づくはずなのに）

奴隷自体はこの世界に数多く存在するが、中には奴隷の売り買いを嫌う者もいる。おおっぴらに市場を開く事は品がないとして奴隷を数多く所有する富裕層の間でもあまり好まれていない。そのため、こういった奴隷を売り買いするのは富裕層の家や隠れた場所で開かれる市に参加するという事になる。

そもそも奴隷とは罪を犯したものを金で引き取って奴隷にしたりする例が普通なのである。敗残兵が奴隷になるという例もあるが、全く何をしていないものを連れ去って奴隷にするのは違法として罰せられる。

しかし、バレなければ何も問題がないことから、無理矢理人をさらって契約をさせ、自分の奴隷にするということが今までになかったわけではないのだ。

かつてフィードがアルを助けた後にそんな話をしていた。

（少なくとも十人以上の子供がここにいます。これが全員この地です。これに手に入れた奴隷だとするといくら何でも多すぎます。これは絶対に無理矢理連れてきたに違いありません）

見ると、子供たちはアルの姿を見て怯えていた。それは、アルの様子を見て怯えているのではなく、自分を追いつめる相手の仲間だと思い、怯えているのだ。

（どうにかしないとけません。ひとまずここを出て、グリーンさんの所へ戻ってマスターに助けを求めれば……）

そこまで考えて入ってきた扉に戻ろうとした時、アルは扉の前に黒い大きな影ができている事に気がついた。

「あつ……」

明らかに自分よりも力があり、強さを持っている存在にアルは身をすくめた。

「おうおう、どうしたんだいお嬢ちゃん。道に迷ってこんなところまで来たのかい？ 駄目だなあ俺たちに取って大事な商品を見ちゃあ。これは大事な顧客に売るものなんだから……」

恐怖から身体が震え、カチカチと歯が音を鳴らす。

「あ、ああ……」

思い出すのは暗く、狭い地下牢。あの時はそこまで不安も、恐怖もなかった。失うものがなかったから。しかし、今のアルには失いたくない大切な日常があった。

いつも彼女の傍にいて優しい言葉と温かなぬくもりを与えてくれた青年。憎まれ口を叩きながらも一番信頼を寄せて傍にいてほしいと感じ、暗闇からアルを助け出した救世主。居場所を与えてくれた大好きな相手。

だが、今ここに彼の姿はいない。目の前にいるのは帰ってきた暗闇からの使者。

アルに向かって迫る大きな手、それを振り払う勇気も力もないアルは、ただただその場に立ち尽くすしかなかった。そして、アルを掴んだ男の横にいるもう一人の男の姿が目に入った。

「ふむ、少々暗いですね。これじゃあ、新しく入ってきた商品がどのようなものか見えません。明るくするとしましょう」

そう言つて男は手のひらを上に向けて魔術の詠唱を始めた。

「天を照らす太陽の欠片。その欠片の欠片を我に与えたまえ——フレア——」

詠唱が終わると男の手に拳一つ分の大きさの小さな火球が現れた。それは部屋の中を照らし出し、今まで見えなかったものを見えるようにした。

アルを掴んでいるのは無精髭を生やし、獣のような髪をたなびかせる無骨な男。そして、その隣にいて部屋を明るくしているのはフ

ードを被り、眼鏡をかけたどこか栄養不足な感じのする細身の男。

「へえ、アルビノの少女とは珍しいですね」

「ん？　なんだ、こいつだいが変わった容姿だが、やっぱり珍しいのか？」

「ええ、滅多にお目にかかれない突然変異種ですよ。その容姿の珍しさから市場では高値で売れます」

眼鏡を抑え、男が解説をする。

「ほお……そりゃとんだ掘り出しものだ。金の方から俺たちのところにやって来るなんてツイてるな」

「そうですね、どうやってここに辿り着いたのかは分からないですが、見たところ見た目も綺麗ですし、売り物としてはかなりの良品です」

既に男二人のアルを見る目は物扱いになっていた。二人の頭ではアルがいくらで売れるのかという考えしか、もうないのだろう。

「ゲード様」

と暗闇の奥から新しい声がした。

「ん？　なんだ、イオか。仕事もしないで、お前はなにをやってるんだ」

暗闇から姿を現したのはアルがずっと追いかけていた少年だった。

「いえ、仕事は今からするつもりです。ですが、契約の確認を思っています」

少年は凜とした姿でゲードと呼ばれた無骨な男の前に立っていた。

「おお、そのことか。心配するな、この件が上手くいったらお前を自由の身にしてやろう。契約どおりにな」

その言葉を聞いて暗く沈んでいた少年の瞳に火が灯る。

「わかりました、その言葉を信じます。では、今から仕事にいきます」

「ああ、せいぜい町の奴らの注目をそっちに向けておけよ」

少年はそう言い残して扉から出て行った。ただ、扉を出る直前、一瞬だけアルに哀れみとも似つかない視線を向けるのだった。

「さて、こいつはどうするか」

「そうですね、ひとまず他の奴隷候補と一緒に鎖につないでおくのがいいでしょう。どうせ何もできないただの子供でしょうし」

「子供」という言葉を強調されてアルは悔しさから歯を食いしばった。男の言う通り、アルは一人では何もできない無力な子供だったのだ。

（マスター……マスターッ！……）

足に枷を付けられ、身動きの取れなくなったアルは自分の主に向
けて助けを求める事もできず、祈る事しかできないのだった。

鎮火

下町での少年の探索を続けていたフィードだったが、一向に少年を見つかる事ができずにいた。少年の手がかりになりそうな物があれば探査魔術で居場所を見つけられる事もできるのだが、手がかりが一つもない現状では聞き込みと足を使った探索方法以外にない。

気づけば、太陽は空に昇りきり、グリンの元を出てから、もうずいぶん時間が経っていた。

（そつえば食事もうくにとつていないな。一度グリンさんの所に戻るか）

強くなる日射しに手で影を作って光を遮る。フィードはグリンの元へ食事をとりに戻った。

「あら、フィードさんお帰りなさい。成果はあった？」

戻ってきたフィードを笑顔で出迎え、グリンが厨房から声をかける。

「ただいま、グリンさん。成果のほうはあったといえば、あったかな。事件解決の糸口は見えているからもう少し待ってくれればどうにかできると思います」

「そうなのかい、それは頼もしい！ それじゃ、これは私からの激励だよ」

そう言ってグリンが厨房から取り出したのは鶏肉の蒸し焼き、焼

きたてのパン、それからヴィシソワーズだった。フィードはそれらが並べられたカウンターの席に座った。

どれも食欲をそそる香りを漂わせており、フィードの口内で唾液の量が増える。

「これ、いただいても？」

「もちろん、そのために取っておいたんだから」

軽快な笑みでグリーンが答える。その様子は早くフィードの食べた反応が見たいといったところだ。

「じゃあ、いただきますね」

そう言っで、フィードは鶏肉をスプーンで口に運んだ。

「うん、おいしいですよこれ」

いつも通りというありがたみがないように聞こえるが、フィードにはグリンの料理はいつもおいしく食べられて満足のいく物だった。この下町に下宿するようになって最初の頃、フィードは酒場などで食事をとっていたが、グリンの、

『当分の間ここに滞在するつもりなんだろう？ だったら食材さえ用意してもらえればうちで料理を作るよ。もちろん、サービスの一環として普通に料理も出すけどね。ただ、そっちは料理も決まってるし、別で料金を取るよ。さあ、どうするんだい？』

と、ありがたい提案をしてもらってからというものの、食材の買

い出しをしてきてはグリーンに調理してもらっていたのだ。

「そう言えば、アルの姿が見えないんですけど、あいつもう部屋に戻りました？」

いつもなら自分が食事を終えていても、フィードのすぐ横に座って傍を離れようとしないう少女の姿が見当たらず、フィードはなんだか居心地が悪くなっていた。慣れ親しんだ存在がすぐ近くにいるというのを当たり前に思っていたせいだろう。

フィードにとって、アルはそれほどまでに傍にいて当たり前の存在になっていた。

（子供の面倒を見るのはこれで二度目だな）

気の強かった、かつての少女の姿を思い出してフィードは知らぬ間に笑みを零していた。一年ほど前に訳あって別れた『彼女』だが、元気になっているのだろうか？ そう思ったが、すぐさま自分にはそんな心配をする資格はないと否定する。

……いや、きっと恨まれてるだろうな。

何も話さずに、知人と呼ぶには薄い縁の相手の元に置き去りにして別れた。それまで自分の事を家族のように慕っていた彼女を裏切ったのだ。恨まれない方がおかしいだろう。

その事を考えると胃の辺りが急にドツシリと重みを増し、おいしかったはずの料理が急に味気ない物に変わってしまった。食欲もなくなり、料理を運んでいた手も止まった。

「おやおや、なんだい。アルちゃんの姿がないからって食欲をなく

されちゃ、せつかくおいしい料理の材料を買ってきてくれたアルちゃんがかわいそうだよ」

「あ、この料理の材料アルのやつが買ってきたんですか……」

「そうだよ。だから残すなんて真似をしたらアルちゃんに失礼つてね。それと、さっき部屋の掃除をさせてもらった時に気がついたんだけどね、部屋の机の上にあんたの硬貨袋が置いてあったよ」

グリンの予想外の一言にフィードは思わず座っていた椅子を倒す勢いで立ち上がった。

「それ、本当ですか！」

フィードの反応に面食らったのが、グリンは言葉に詰まりながらも、

「あ、ああ。ホントだよ。買い出しに出かける前には何も言ってなかったから、出かけた時に拾ったんじゃないのかい。中身もちゃんと入っていたし。見つけてくれたアルちゃんに、きちんとお礼を言うんだよ」

グリンはアルにお礼を言うようにフィードに促すが既にフィードの耳には言葉は届いていなかった。

（アルが俺の硬貨袋を拾った？ しかも中身があったっていうことは相手はまだ金を使っていなかったのか。いや、それはいい。これはチャンスだ。もし硬貨袋を持っていた相手と接触していたのなら、相手はアルと俺の関係を知らない。それなら、アルに手伝ってもらって……）

そう考えたところで、フィードは自分の考えがこれまでの行動と矛盾している事に気がつく。

（——ッ！　そうじゃないだろ！　アルはこういった荒事から無関係の場所にいさせるって決めていたはずだ。そのために今まで依頼があっても遠ざけていたんじゃないか。ちよつとの気持ちで首を突っ込ませた結果は『彼女』で懲りたはずだろ）

フィードの並々ならぬ雰囲気を感じたのか、グリーンは黙ってフィードの傍を離れて厨房へと戻っていった。

（しかたない、少し遠回りになるかもしれないが、ひとまずアルに話を聞いてみよう。それにまだ相手と会ったと決まった訳じゃない……）

残った食事を一気に胃の中にかき込み、フィードはその場を後にし、二階にある自室に向かった。

「アル、ちよつといいか？　聞きたい事があるんだが」

扉を開けながら声をかけるが、室内にはアルの姿は見当たらなかった。

（あれ、いないのか？　しかたない、グリーンさんにちよつと聞いてみるか）

再び一階へと降りたフィードは厨房の中にいるグリーンへ声をかけた。

「すみません、グリーンさん。アルの姿が見当たらないんですけど、どこへ行ったかわかりますか？」

「アルちゃん？　そう言えば、食事場の掃除を頼んでから姿が見当たらないね。……そう言えば、外にゴミを捨てに行った時、何か見つけたのか箒を放り出して勢いよく走り出したのを見たような……」

グリンの言葉にフィードは背筋が寒くなるのを感じた。

（まさか、アルの奴。一人でなにかしてるんじゃないんだろうな……）

アルがフィードの力になりたいと思っていたことをフィードは以前から気づいていた。

かといってフィードもアルを荒事に巻き込むつもりはなかったのだ、グリンの手伝いをさせるという理由を与えて自分の力になっていると言い聞かせてきた。しかし、アルはどことなく不満げだという事も感じていたのだ。

（頼むぞ、頼むから今回の依頼に巻き込まれてくれてるなよ。下手をするとこの件はかなり大事なんだ……）

先ほどから何度も速いテンポで拍動する心臓を掌で抑え、不安を隠そうとする。そして、フィードが不安を抱くのと同時に外から大きな声で、

「おい、盗賊が出たぞ！　今度は家に火を放ちやがった！　誰か水を、水を持ってこい！　このままじゃ他の家にも燃え広がっちゃう」

フィードの不安を更に増大させる声が聞こえてきた。

（つたく、こんな時に……。まさか狙ってやってるんじゃないだろうな。いや、そんなことより今ならまだ盗みに入った奴もそう遠くにいていないはずだ。この犯人が俺の予想通りなら近くにいれば捕まえられるはずだ）

勢い良く宿を飛び出し、フィードは煙の上がる方角へと走り出した。

フィードが現場に着いたときには、既に火の手は高々と上がり、民家一軒を丸々包み込んでいた。燃え盛る炎は隣接する家屋に進行しようとし始めている。

そんな強大な力に必死に抗うように下町の人々は用水路や噴水から汲み上げてきた水を火の中に投げ入れていた。

しかし、それも焼け石に水。火の手は収まるどころか、より一層その強さを増している。

「くそっ！　どうにかなんねえのか。このままじゃ、町中が火の海になっちまう」

緊迫した空気の中、声を張り上げるのは下町でも顔が広く知られているクルス。いつものような調子ものの雰囲気はそこにはなく、今はただ町の危機を乗り越えようと真剣な面持ちだ。

「そうは言ってもクルス、炎は強くなるばかりだし、このままじゃどうにもならねえよ。それに、俺たちもどこかで見切りをつけねえと、いつ巻き込まれるか……」

クルスと同じく消火作業に当たっている男性が声をあげる。彼の言うとおり、クルスたちの手ではもうどうしようもできないところまで来ていた。

「なら、このまま黙って見てろっていうのかよ！」

「しょうがねえだろ。それに魔術隊を要請すれば時間はかかるが確実に鎮火作業をしてくれる。応援を要請するしかねえよ」

「要請してもここに来るまで時間がかかるだろうが！」

「じゃあ、俺たちに何かできるのかよ！ 魔術を覚えてるやつはちらほらいても、力が足りないんだよ、俺たちは！」

男の正論にクルスは黙り込んでしまう。彼もわかっていて、下町には力がない。それがいくら理不尽であろうとも自分たちより上の存在に見下されようとも、彼らに力を借りるしかないのだと。

消火作業は止めることなく、それでもどうしようもない現実を前に途方にくれる彼らを見て、フィードが静かに呟くのはこの町に来て一度も口にしなかった魔術の詠唱。口から零れる言葉とともに、静かに大気が震える。

「大気を漂う数多の液体。その欠片を集め、我に与えたまえ——ア
クア——」

紡ぎだすのは水の魔術。それも、魔術を扱うものならば初步に習う基礎呪文の一つ。大気中に漂う水分を集め、固める。作られるのは拳一つほどの大きさの水球。

基礎、初歩、というものはその道を極めていくものにとって存外無下にされがちである。それは、自身が成長するにつれ、その道でできることが増えていくからである。ゆえに最初に覚えたものも、それよりも派手で、効果の高いものが現れると、ついそちらに目がいつてしまう。そのため、どれも中途半端な習得になり、応用が利かない。

しかし、基礎を極めれば、その系統に幅広い応用が利くし、時にはそこから思いもかけない発想が生まれることもある。ゆえに、フールドはどの分野でも基礎を重要視していた。

空中にできた水球に更に魔力を流し込む。見た目は変わらないが、ものすごい勢いで水球は圧縮され密度を高めていた。やがて、圧縮に耐えられなくなり始めた水球がその形を崩そうとしたとき、

「お前ら、そこから離れる！」

いまだ消火作業を続ける人々に向けてフールドは声を張り上げた。そして、宙に浮いていた水球を燃え盛る炎の中へと投げつけた。

その瞬間、轟とすさまじい衝撃と過度の圧縮から開放された水流が一気に弾けた。爆散した水の衝撃によって家屋の一部は吹き飛び、先ほどまで目の前で轟々と燃え盛っていた炎は一瞬にして姿を消した。残されたのは半壊した家屋と、焦げたあとの残った隣家。

いまだ何が起こったか理解できていないのか、周りにいた人々は呆然とその光景を見ていた。次第に何が起こったのか理解し始めたのか、人々の中の一人が声をあげた。

「や、やった！ 火が、火が消えたぞ！」

事情を完全に飲み込めたわけではなかったが、彼らの一番の問題だった燃え盛る炎の鎮火はなされたのだ。喜ぶ彼らを見て、フィードは一息ついた。

（よし、これで問題は一つ片付いた。あとは……）

衝撃的な出来事を前に呆然としている人々から少し離れた位置で同じように呆けている少年の元へ、フィードは一気に駆けだした。

「なっ！？」

驚く少年。次の言葉を発しようとするが、腕を後ろにねじられ、そのまま地面に押し倒された。

「さて、陽動のつもりでやってたんだろうが前回と今回は派手に動きすぎたな。悪いが知っていることを話してもらっぞ」

少年の上から冷たい視線で見下ろすフィード。少年は出し抜かれたことが悔しいのか、それとも自分が犯人だとバレるようなうかつな行動をとったことへの後悔からか、歯軋りをし、自分を押さえつけるフィードを睨み付けていた。

自由

「それで、お前の知っていることを話してもらいたいんだが、いつまで黙り続けるつもりだ？」

火事の騒ぎを収める中、民家に火を放った犯人を人知れず捕まえ、捕縛魔術で抑え、人目につかないところに連れてきたフィードが問いかける。

「……」

しかし、相手はフィードと視線を合わそうとせず、それどころか一言も喋ろうとしなかった。

「悪いが、あまりお前に構っている時間はないんだ。暴力に訴えることはしたくないから、なるべく早く話してもらえると助かる。こっちはもう死人も出てるんだ。

陽動をするってことは人が死ぬよりもお前たちにとって益がある何かを裏でコソコソと行ってるんだろ？ それくらいはもうわかっている。おそらくお前が人を殺していないであろうこともさっきわかった」

フィードの言葉に犯人はビクツと肩を震わせた。表情には驚きと戸惑いが混じっている。

「ど、どうして……あれが私じゃないだなんて」

「まず第一にお前は人を殺すような度胸を持ち合わせていない。俺の初歩魔術程度で呆然とするやつが、人を殺して二日で普通に次の

犯行をするような大胆な精神を持ち合わせていないってことがある。他にもお前みたいな力も、知恵もなさそうな餓鬼にとっさに人を殺せる機転も器量もないってのと、それまで小さな犯行を続けていたのに、急に人を殺すなんて大胆な手を使ったってのもな」

的確に相手の分析をしていくフィードに犯人は意識していない自分ですら暴かれる得体の知れない感覚に吐き気と嫌悪感を覚えた。しかし、圧倒的力量差の相手に捕まえられ、反抗する力もないため、ただにらみつけることしかできなかった。

「おそらくお前は裏で糸を引いているやつからすれば使い捨ての道具のようなものじゃないのか？」

人を殺したのはおそらく盗みを働いたときに相手に顔を見られてそのまま逃げ、それをお前の主人に知られたからだろう。殺したのはもちろんお前じゃないがな」

「……」

「それに、お前そんな格好してるけど女だろ。そうなるとますます信憑性が湧いてくる。お前くらいの年の男ならもう少し力もあるしな」

そう言っつて少年、もとい少女の胸元に視線を向けるフィード。

「それは脅しか！ 私の身体を貪りたいなら好きにしろ。どうせお前に捕まった時点で私の仕事は失敗したんだ。あとはもう殺されるしかない。けどな、私は最後まであがくぞ。自由になるためなら最後まであがいてみせる！」

瞳に涙を集め、恐怖から必死に震える少女。そんな少女にフィード

ドは近づき、肩に手をかけた。

目を瞑り、今から起こることを想像して今にも吐き出しそうになる少女。嫌悪感が寒気に代わり、背筋をなでた。

ブリツと両肩の布が破れる音がして、とうとう予想していることが起こったと確信する。ああ、今から自分はこの男に犯されるのだと。

目を瞑ったまま、覚悟を決める。いつそのこと舌をかで死んでしまいたい気持ちだったが、それは彼女の主であるゲードからの命令によって自害することは不可能になっていた。つまり、このまま慰みものになるしか道はなかった。

（くそ！　こんな男に……）

悔しさと悲しさから、とうとう涙が零れ出た。今までの辛い日々
のことが走馬灯のように一気に脳裏を駆け巡る。

（そもそも、あのゲードに捕まったところから私の人生は終わったんだ。家族のいない私を捕まえて、無理やり奴隷として契約させられて、あれこれときき使われて。

殴られ、蹴られ、死にそうになるくらい空腹になるまで飯を抜かれて。あげくこんな男に捕まって。せつかく今回の仕事が上手くいったら自由になれるはずだったのに。なんで……なんでっ！）

溢れる涙は止まることなく流れ出る。一瞬のことが永遠のようにも感じれて、閉ざされた視界の中、運命の時を今か、今かと苦痛と不安と共に待っていた。

しかし、いつまで経ってもその時はこなかった……。

(……?)

不思議に思い、薄っすらと目を開くと、少女の肩に刻まれた烙印をじっと見つめるフィードの姿がいた。

「な、なにをしてる。私を犯すならさっさとしろ!」

虚勢を張り、今にも消えそうなほど小さな声でフィードに告げる少女。だが、フィードはそんな彼女の様子がおかしいのか笑っていた。

「何がおかしい! お前は私を慰み者にするためにわざわざこんなところに連れてきたのだろう? なぜ早く私に手を出さない!? それともお前のモノは不能なのか?」

少女が口にするにはあまりに下品で、今のこの状況では相手の気分を逆なでするだけしかないのに、少女はフィードを罵倒した。しかし、フィードはそれに答えない。文句も言わない。ただ一言。

「なあ、お前は自分がいかにも不幸でこの世の地獄にいるとも思っているだろうが、お前みたいなやつはこの世にごまんといえるんだぜ。別に俺がお前より不幸だとか言うつもりもないが、どうせお前自分の主に自由と引き換えに陽動をやれとでもいわれたんだろ」

フィードの的を得た発言に少女は何も言葉が出なかった。それは全て事実だったからだ。

「馬鹿だなあ。そんなに自由になりたかったら何でもっと頭を使わない。さっきも言ったと思うが、お前の主はお前のことを道具とく

らいにしか思っていないんだぞ。自由にされる前に殺されるっていう考えがでなかったのか？」

あまりにも遠慮のない言葉を投げかけるフィードに少女は眼光を鋭くし、怒りを全身で表した。

（お前に、お前になにがわかる！ こんな辛い仕打ちも知らないで！ 殺されるだって？ そんなことくらいわかってた！ でも、でも希望がない私はそれに縋るしかなかったんだ！）

一度は止まりかけた涙も、またポロポロと地面に落ち始めてしまった。悔しかつたのだ、これだけ無遠慮にものを言われることも、それがどうしようもない事実だったことも。

「くそっ！ くそっ！」

ただ、どうしようもなく、少女は泣き続けた。そんな彼女にフィードは容赦なく追い討ちをかける。

「どうして主を殺そうと思わなかった？ そんなことすら思わなかったのか？」

何を馬鹿なことを言うのかと少女は思った。そんなことは今まで幾千、幾万と考えた。しかし、一度でもそれを実行して失敗でもすれば殺されるのは自分だ。

「本当に自由になりたかったのなら、相手に媚へつらつても、自分のプライドがどれだけボロボロになろうと、相手がほんの一瞬油断するくらいの信用を勝ち取るくらいしてみせろ。」

それだけで大抵のやつは殺せるんだ。それができなかったのはお

前がそういったことをやる前から諦めてたってことだ。今こうなってるのも目の前にぶら下げられた自由って餌にだけしがみ付いて考えることを放棄していたお前が悪い」

「うるさい！ うるさい！ なんでお前にそんなこと言われなきゃならないんだ！ うるさいんだよ、さっきから正論ばっかり並べやがって。そんなこと私だってわかってるよ、だからって正論が全部通るのが世の中じゃないだろうが！ それだったらどうして私はこんなに苦しい思いをしなきゃいけないんだよ！」

少女の悲痛な叫びをフィードはただ黙って聞いていた。

「私だって、私だってな！ もっと自由に生きたいよ。でも、誰も助けてくれない、気づいてくれない。だったらどうやってもムリじゃないか！ 私一人じゃ、どうあっても自由にはなれないんだよ！」

口から出てくるのはおそらく今まで少女がずっと抱え続けていた心の闇。誰にも話せず、一人で血の涙を流し続けていたのだろう。

「なら、お前は私を助けてくれんのか？ ムリだろそんなこと！ 町にこんなことして、主に命じられたらすぐにでも死んじまう私をお前は助けてくれんのかよ！」

小馬鹿にした笑みで、それでも涙は止まらず、少女はフィードを罵倒し続けた。しかし、とうとう出す言葉もなくなったのか、それとも疲れ果てたのか、少女は黙ってしまった。

「言いたいことは、それで全部か？」

その言葉に少女はうなずく。後悔はしていない。死ぬ前に言いた

いことは全て言い尽くした。

フィードの右手が徐々に少女の顔に近づく。

（ああ、今度こそ本当に終わりだ……）

再び瞼を閉じ、視界を閉ざす。ビクビクと怯えながら、立ちすくむ少女にとつとつ衝撃が来た。

「イタッ！」

しかし、それは予想していたものよりもはるかに小さく、たいして痛みのないものだった。

「馬鹿、お前みたいな餓鬼が人生悟ったようなことってんじゃねーよ」

目を開けた先には先ほどまで恐怖の対象であつた青年はいなかった。

「今のは俺の金を盗んだ分の仕打ちだ。これだけで済ませてやるんだから感謝しろ。言っておくが町に与えた被害に関することを許しているわけじゃない。それは後々償わせるからな」

未だにフィードが何を言っているのか理解できない少女は、ここに来る前のように呆けていた。

「んじゃ、まあお前を償わせるのは自由にしてからにするか」

自由という言葉に少女が反応する。

「な、なに言っただお前！ そんなことできるわけないだろ！」

奴隷の契約は主の契約解除の承諾と魔術師による解除魔術があつて始めて成立する。いくら凄腕の魔術師でも契約者の承諾がなければ烙印の解除はできないのだ。

「それができるっていったらどうする？」

子供が親に得意なことを自慢するような、笑みを浮かべフィードが尋ねる。

「そ、そんなの。そんなの……」

上手くいくわけない。そう思いながらも、少女の心は揺れていた。自由が手に入れられる。もしかしたら、嘘かもしれないのに、降つて沸いた希望にどうしようもなく少女は揺さぶられるのだった。

「できるはずないって？ いいか、俺はできる。それだけの経験も積んだ、屈辱も絶望も味わってきた。お前みたいに死にたいようなときもあった。でも、俺は諦めずに進んできた。人の助けもその中であつたし、自分で解決したこともあつた。だからさ、諦めんな。そんな簡単にやること全部諦めてたらやれることもやれなくなるぜ」

それだけを言つてフィードは詠唱を開始した。

「正しきもの、その存在を認めない。偽りをもつて事をなし、偽りをもつて騙し、救おう。」

この世界はかくあるべし。虚構こそが真実。真実こそが虚構。偽りの生成、その実を我に与えたまえ。

——フィクフォーメーション——」

詠唱の終了と共に何か巨大な力が少女の烙印に熱を持って集まった。痛みはある、だが同時に何か重いものが烙印から抜けていくのを感じた。

「これで終わり。お前はもう自由だ」

あつさりと、あまりにもあつさりと自由という言葉を受け渡されて少女は戸惑った。嘘をついているのではないか？ 自分を騙しているのではないかと。しかし、そんなことを目の前のこの男がする意味もなく、今はただ自由という言葉を信じるしかなかった。

「なんで、こんな風にして助けるんだ？ お前さつきはあれだけ偉そうに私に説教してたじゃないか。頭を使え！ 自分で成し遂げろって！」

「確かにそうは言ったが、あれはあくまで俺の自論だ。別にお前に強制するつもりもない。さっきのは、お前を見ていて昔の俺を見ているみたいで、むかついたから説教みたいになったところはあるけどな」

「じゃあ、なんで私を助けたか理由を言え！ まさか助けてくれて頼んだからとかいうんじゃないだろうな！」

「ま、それも一つの理由ではあるけどな。言っておくけど今の呪文は烙印の契約解除をしたわけじゃない。解除一步手前の状態にしてあるだけだ。契約を偽りの契約で誤魔化してお前の主人からの命令が届かないようにしているだけ。だから、本当に自由になりたいの

ならお前が主人に契約解除を申し付けるしかない」

「なっ!？」

「そのままでも本当に契約解除した状態と変わらないけどな。それでお前が納得するならそれでもいいが、そのままだと結局本当の意味での自由にはなれないぞ。実際に自由になったとしてもまずは償いをさせるところから始めるけど」

「そんなことが私は聞きたいんじゃない!」

「なんだよ? 別に助けてもらっただからいいだろうが」

「そうだが、そうだが……」

「まあ、今の礼にお前の知っていることは全部話してもらっただけでないとその魔術の効果解除するぜ」

脅しの言葉を口にするフィードだが、今の少女にとってそんなものはなんの意味もなかった。

（こいつは、こいつは私が今まで見た人間の中で一番の甘ちゃんで、お人よしだ!）

少女が自分のことを裏切ると思っていないのだろう、さっきまでかけていた捕縛魔術はいつの間にか解かれていた。逃げようと思えば逃げられる。実際に逃げれば十中八九捕まえられるが、それでも逃げるという選択肢を用意してくれている。

少女はしばらく黙りこくっていたが、やがて口を開き、

「わかった……お前に全部話す」

しぶしぶといった様子でフィードに答えた。

「ん、了解。それじゃあ早いとこ話してもらおうか。時間が経つと不味い気がするからな。——っと、その前にお前の名前を聞いておこうか。名前も知らないと不便だからな」

言いつつ少女の頭を撫でるフィード。それはいつも彼の傍にいる少女にしていることだ。背丈も年齢も近そうな少女が目の前にいたせいか、無意識に行ってしまったのだろう。

「……イオだ」

その行動に少女は恥ずかしさからか、先ほどまでとは違った意味で視線を合わせられなくなり、そっぽを向いたままポツリポツリと話を始めた。

仇敵

オレンジ色に染まり始めた空。その下を走る一つの影があった。速さは俊足。普通のものには一瞬で影が通り過ぎたとしたか捉えられない速さだろう。

身体強化の魔術を使ったフィードが、先ほどの虚構魔術を使用した際に上書きした契約魔術の縁を辿って、ゲードたちの元に向かっているのだ。

だが、その表情にいつもの陽気な笑みはなく、代わりにあるのは鋭く冷たい眼差し。深い悲しみと燃え盛る憎しみ。長い間抑えられていた、それをぶつけることができる喜びから口元は酷く歪んでいる。人を寄せ付けない気配を放ち、その様子はまるで鬼。

「やつが、ここにいる」

待ち焦がれた仇敵との再会に心臓がドクンと激しく高鳴る。落ちて着けと心の中で叫ぶもう一つの声は今の彼には届かない。

脳裏に浮かぶのは昼間にあった炎など焚き火に感じられるほど広く、激しく燃え盛る炎の嵐。家を燃やし、地を燃やし、熱風が吹き荒れ、息も絶え絶えになるほどの炎。

目の前で凄惨、残虐、悪趣味極まりない殺し方をされ、殺されてなお弄繰り回される知人、友人、家族を見せ付けられ、それでも死ぬことは許されなかった……かつて。

己の無力さをかみ締めさせられ、下卑た笑いと共に去っていった仇敵。

『十二支徒』

数年前、東の武の国ジャンを騒がせた犯罪者集団。個々の實力はまさに絶大。盜賊など生ぬるい。

やつらは災厄。襲われたものはひとたまりもない。諦めるしかない。そういわれるほどの一団だった。

村を焼き、町を襲い、人を殺し、金を奪い、辱め、実験し、死してなおその尊厳も奪われる。

そんな一団にかつてフィードの村も襲われた。生き残ったのは彼一人。正確に言えば助けられたのだ。よりもよって、その十二支徒の一人に。

当時の自分の無力さをかみ締め、齒軋りをする。魔力探知の結果からして距離はもうそう遠くない。相手も既にこちらが探知していることに気がついていいるだろう。そんなこともできない相手ではない。

グリンの元にイオを連れて戻った際、自室から持ち出した愛剣をギュっと力強く握り締める。

地を駆け、屋根に飛び移り、目的の場所まであと少し。そこでフィードは目的の場所から数十メートル単位で人払いの結果が張つてあることに気がついた。

（誘ってるってことか……舐めた真似を！）

走る速度を上げ、目的の廃屋の屋根を突き破り、降り立つ。目の前には二人の男。その奥には身動きが取れないよう重りのついた鎖につながれた少年少女がいた。

「マス……ター？」

その中には彼を慕っている少女の姿もあった。夜目の利くフィードは暗くてもアルがどんな様子だかわかった。頬は赤く腫れ、殴られたのだと一目で分かった。衣服は裂け、肩を震わせて怯えている。その様子を見て、ようやくフィードは心の声に耳を傾けた。

「心配するな、アル。もうちょっと待ってな、すぐに自由にしてくれるから」

笑顔を向けるが、身体からあふれ出るのは激しい殺気。それに気がついたのか、ゲードが声をあげた。

「おいおい、いきなり上から落ちてくるなんて常識知らずにもほどがねえか？　よほど教養が悪いみたいだな、お前」

戦での前口上のように挑発するゲード。

「お前らみたいに子供を使って裏でコソコソと動くような卑怯者に、教養がどうだとか説教を受けたくないな」

言葉ではゲードの相手をしているフィードだが、その視線は奥にいるフィードをかぶった男へとずっと向けられている。そのことにゲードも気がついたのか、

「おい、こいつお前の知り合いか？　そうだとしたらずいぶんと無粋なやつじゃねーか」

ゲードは肩をすくめて男に問いかける。

「知り合いといえば知り合いですかね。ただし、お互いに命を賭けあうやり取りをする知り合いですが。こんなところまで追いかけてくるなんて困ったものです。しばらくおとなしくしていたら思っていたんですがね」

それまで黙っていた男がようやく口を開いた。しかし、口から出るのは皮肉ばかりで、フィードに気おされた様子は微塵もない。

「黙れ。おとなしくしていたのはお前たちのほうじゃないのか？今まで派手に活動していたくせに一体どういう風の吹き回しだ」

「どうもこうも……。私たちのメンバーをこの数年で半数近く殺した相手がうろろしているんですよ。派手に動いて居場所を知られるのはちよつとマズイじゃないですか。

といっても私たちが集まって行動するなんてことはめったにないので、他の人がどのような考えでおとなしくしているかは私には図りかねますが……」

「ほう。十二支徒ともあろうものがずいぶんと謙虚な物言いじゃねーか。そんなに自分の命が惜しいのか？」

十二支徒という名称をフィードが告げると、相手の素性を知らなかったのか、ゲードが目を見開き驚いた。

「こいつはたまげた。ログ、お前さん悪名轟くあの十二支徒の一員だったのか！」

ログと呼ばれた男に向けるゲードの眼差しに恐怖などなく、そこにはただ羨望と尊敬の念があるのみだった。犯罪を犯すものからす

れば、国の力すら寄せ付けない十二支徒は犯罪者たちの畏敬の象徴の一つといえるのだ。

「ええ、そうですよ。言っていないませんでしたか？」

「ああ、そんなことを聞いたのは初めてだ。あんたがそんな大物だと分かっていたらもつと派手なことをやったもんだ。こんな奴隷商人みたいなみみっちい事なんてやらず、俺を裏切ったフラムの騎士団に復讐をしてやったのに……」

「おや、物騒なことを言いますね。大体そんな派手なことをしてしまつたらフラムの全騎士隊を敵に回してしまうではありませんか。やるならもつと地味なところ、そうですね……騎士団の家族を殺すところから始めないと」

声を殺して笑い声をあげるログにフィードはとうとう我慢の限界がきたのか、

「もう喋るな。お前たちの声を聞いているだけで腸が煮えくり返る」

鞘から剣を抜き出し、構える。

「——死ね」

身体強化の魔術によってあがった異常なまでの速度で一気に相手との距離をつめる。だが、そのままあっさりとやられてくれるほど相手も馬鹿ではない。すぐさまフィードの動きに反応し、左右に分かれる。

当然フィードは十二支徒のログを追撃する。

「おやおや、そんなに私と戦いたいのですか？ 困ったものですね」

飄々とし、余裕を保ちながら、ログは廃屋の外に出た。障害物のない通りで、二人は互いに魔術の詠唱を始める。

「風よ、微細な力の塊を集め、固め、極限まで鋭く鍛えよ。」

その速さとともに敵を切り裂け——ウインドスラスト——」

「大気を漂う数多の液体。その欠片を集め、我に与えたまえ——ア
クア——」

風の魔術を詠唱するのはログ。対して水の魔術を詠唱したのがフィード。詠唱の速度は互いに同じ。だが、高位の術を詠唱しているログが初歩魔術を詠唱しているフィードと速度が同じということは、魔術の分はログにあるといえる。

幾つもの魔力光を帯びた風の刃と水球が両者の周りに漂う。

「さて、あっけなく死ぬなんて結果だけは勘弁してくださいよ」

そう言っただけで先に動いたのはログだった。空中に漂う風の刃の一つをフィードの首目掛けて解き放つ。

（チィッ！ いきなり致命傷狙いかよ）

とっさに風の刃を避けるが、刃は追尾してきた。おそらく、ログが操作しているのだろう。

「——ッ！ アクア！」

フィードは叫び、宙に漂う幾つかの水球を固め、一つの大きな水球にし、それを縦に伸ばして風の刃にぶつけた。

ぶつかり合う水球と風の刃。対消滅した二つの魔術を見て、「ほう」とログが呟く。

「やりますね。普通ならあれだけで首が飛んで終わるんですが。どうやら、他のメンバーをあなた一人で殺したというのも、あながち嘘でもなさそうだ」

そう言うと、ログは次々に風の刃をフィードに放った。今度は一撃必殺を狙ったものでなく、少しでもいいからダメージを与えたいという目的だ。

フィードは自分の周りに大きな水の膜を作り出し、風の刃の勢いを吸収した。

「モノは使いようですか。なかなかどうして魔術の扱いに長けています」

新たな詠唱を始めようとするログに隙を与えまいと、フィードは張ってあった膜を再び水球に戻し、それを投げつけた。

大量の水球が勢いよくログへと向かう。詠唱を中断するが、迫り来る脅威に慌てるわけでもなく、易々と水球の束を避ける。

「困りましたね。これは私一人ではキツイかもしれません。なので、他の者の手を借りることにしましょうか」

ログの視線の先にあるものに気づきフィードはとつさに身を振る。いつの間にか背後にフィードの身の丈ほどはありそうな両手剣を持ったゲードの姿があった。殺気を抑えて近づいたのだろう、一瞬反応が遅れたフィードはゲードの一撃を避けそこね、切られた左腕が

ら薄っすらと血が滲み出した。

（マズイな、二対一か。ログはともかく、ゲードとかいうやつ。たいた相手じゃないと高をくくっていたが、思った以上に腕が立つ。長期戦はマズイ。早めに片をつけないと）

フィードは負傷していない右手で剣を構え、次の一手を打った。標的をログからゲードに変え、剣を打ち込む。

ぶつかり合う剣と剣。手数で攻めるフィードに対し、一撃必殺のゲード。どっしりとした構えで、すばやく、あらゆる方向から切りつけるフィードの剣撃に対応する。そして、連撃の隙を見ては強力な一撃を放ってくる。

「なかなかやるな！ 騎士団で副隊長を務めてた俺相手にこうも切りあえるとは」

「今はただの犯罪者じゃねーか。過去の栄光を偉そうに誇るんじゃない！」

嬉しそうに剣を交えるゲードに皮肉を返すフィードだが、内心はかなり焦っていた。騎士団で副隊長を務めていたと豪語するだけはある力量を目の前の男が持っていたからだ。これではますます長期戦に持ち込むことができない。

どちらか一方の腕が悪ければ、そちらを片付けてもう一方の相手をすぐにできるのだが、こうなってしまうてはそれも行かないのだ。

「そら、相手は一人じゃありませんよ。サポートしますよゲード」

ログが詠唱を開始する。

「速さを、効率を求め、より単純、より俊敏に——インプロスピード——」

詠唱を終えると、先ほどまでフィードのスピードに遅れていたゲードが同じ速さで打ち合うようになってきた。

より隙のなくなった相手にフィードは内心舌打ちをする。

（くそっ！　ただでさえ打ち込む隙がないのに、スピードまで追いつかれたらますます攻めづらくなるだろうが）

そんなフィードの考える時間すらも奪おうとゲードが速くなったスピードで攻めにまわる。

「おお！　これは身体が軽い。ほらほら、さっきまでの勢いはどこにいった？　それとも威勢がいいのは口だけだったか？　ここまで来ておいてそりやないぜ、小僧」

防戦一方。さっきまでとは打って変わって守りにまわってしまったフィードはどうにか隙を見つけようとするが、二対一のせいか、迂闊に身を削って攻めることもできない。

（どうする、このままじゃジリ貧だ。いずれ致命傷を負う）

わかっていながら、どうしても相手の連撃を防ぐことに意識がいつてしまう。

（どうすれば……）

追い詰められたフィードの脳裏にかつて告げられた言葉が浮かび

上がる。

「いいか、お前は弱い。絶対に弱い。そんなお前が自分よりも強い相手を相手にするときには効果的なことを教えてやる。それは相手がいかに思えないことをすることだ。といっても勝算があることをしろよ、投げやりになっても意味がないからな。」

これは自分が強くなって自分よりも弱い相手を相手にするときにも有効だ。だから、自分が弱いときから実践して後になっても戦術の一つとして使えるようにしておけ。わかったか！？」

一つの考えが頭に浮かび、フィードはすぐさまそれを実行した。

罅迫り合いの際、わずかに身体を傾け、血のにじんだ左腕をゲードの身体に重なるように合わせる。それが、ゲードには隙に見えたのだろう、両手剣に今まで以上に力を込め、一気に押し込もうとする。

「もらっ
たあ
あ
あ
！」

その一瞬の機会をフィードは見逃さなかった。

「血よ、身体から流れ出た我が一部よ、その身を凝固し、敵を貫け——ブラッディー・ニードル——」

詠唱を終えると、フィードの左腕から流れ出る血が細い針のように鋭く伸び、ゲードの身体に突き刺さる。細く、薄いそれは痛みこそあれど、損傷はそれほどない。しかし、攻め立てる中で一瞬でも痛みを悶えてしまったゲードにとってその一瞬の隙は致命的だった。

「終わりだ！」

フィードは罅迫り合いを解き、ゲードの背後に回り、首元に魔術で強化された肘打ちを思い切り叩き込んだ。

「——かつ」

その一撃で昏倒するゲード。フィードは倒れた相手に一瞥すると、

「次は……お前だ」

ログの方へと向き直り、鋭い殺気をぶつけた。

「おお、怖い怖い。このままあなたの相手をしてあげてもいいんですが、どうもこの国のお偉方に気づかれたみたいですね。あなたが後先考えず強大な魔力と殺気を振りまくからですよ」

「御託はいい。それに俺はお前を逃がすつもりもない。お前の言うお偉方が気づくことが関係ない。俺はお前を殺せばそれでいい」

「後先を考えない馬鹿はこれだから……。そうですね、ならあなたの言葉が本当なのかどうか試させていただきますよ。私は勝算のない戦いはしない主義です」

「風よ、微細な力の塊を集め、固め、極限まで鋭く鍛えよ。」

——詠唱省略—— ——ウインドスラスト——」

言うや否やログは再び幾つもの風の刃を宙に漂わせた。しかし、簡易で作ったせいか、先ほどに比べるとその数は少ない。

「チッ！ 大気を漂う数多の液体。その欠片を集め、我に与えたま

え——アクア——」

先ほどと同じように数多の水球を作り出すフィード。

「では、見せてもらいますよ。あなたの選択を」

ログの言葉と共に風の刃が一気に解き放たれる。

「甘いんだよ！ 同じ手を通じると思ってるのか！？」

フィードも同じように水球をぶつけようとするが、風の刃の対象がフィードではないと気づく。

（このままだと、これは俺に当たらない。何が狙いだ？ 時間稼ぎのつもりか？）

と、そこまで考えてフィードの背後にアルたちがいる建物があることに奇がついた。

「——ッ。これが狙いか！」

フィードはすぐさま水球を集め、建物へ向かう風の刃を防ぐ壁とした。だが、風の刃の半数はそこから軌道を変え、フィードの元へと向かう。

（水球を戻す暇がない。くそっ！）

迫り来る風の刃を向上した身体能力でどうにか避けるフィード。地面や建物に避けた風の刃が次々とぶつかり、目も眩む砂埃を巻き上げる。

「今回は中々楽しい戦いでしたよ。いずれまた命を賭けた戦いができるといいですね」

ログの言葉が聞こえたと思うと、一瞬にしてその気配が消えた。

「ふざけるな！ 逃げるのか、十二支徒のお前が！ 待て、待ちやがれ！」

砂埃が止み、視界が開けるが、そこにログの姿はなく、フィードによって昏倒され、風の刃によって起こった衝撃によって地面を転がったゲードの姿があるのみだった。

「ちくしょう……」

悔しさをかみ締め、それでもログがいた場所の先をフィードは睨み続けた。

フィードは捕縛魔術でゲードを縛り、建物の外に置くと、アルや捕らわれた少年少女が待つ建物の中に入った。

「……マスター？」

「もう大丈夫だ、アル。これでみんな自由だぞ」

そう言ってフィードは風の魔術で捕まっている皆の鎖を切った。

「あとは、騎士団とかに任せることになる。これだけ大事になって

ればこの国の騎士団といえど怠けていられないだろうからな」

安心させようとなるべく優しく話しかけるフィード。そして、アルの元へと近づこうとしたとき、それは起こった。

ビクッ！

フィードが一步を踏み出した瞬間、アル以外の少年少女たちが身体を震わせたのだ。

「怖い、怖いよ……」

それはフィードがログやゲードの仲間という意味ではないとわかっていての言葉だった。少年たちからすれば圧倒的な力を持つていたゲードやログに変わって現れたフィードはいくら彼らと違う優しい言葉を投げかけても、より強い力を持った恐怖の対象としかかなりえなかったのだ。

そんな、周りの様子に戸惑い、おろおろとするアル。

「……」

フィードは困ったような笑みを浮かべ、頭を掻き、

「ちょっと待ってるよ、今から町長に報告して騎士団を呼んでもらうからな。それまでここには結界を張っておいて誰も寄せ付けられないようにしておくから、お前たちも動くんじゃねーぞ」

そのまま後ろを振り向き、入り口に向かって歩き始めた。

アルはそんなフィードの背を眺めていたが、何故かフィードが遠くに行ってしまうような予感がして立ち上がり、フィードの元へと駆け出した。そして、まさに入り口を出ようとしたフィードの腰に抱きついた。

「一人で行っちゃ駄目です。私も付いていきます！」

必死にフィードにしがみ付いて離そうとしないアルに、フィードは戸惑ったが、やがてその目に浮かぶ決意の強い光に根負けし、

「わかった、わかった。アルも一緒に行くか」

と、アルの同行を許可したのだった。安心したのか、アルはフィードから離れ、その隣に並び立った。

（一瞬、マスターがどこかに行ってしまういそうな気がしました。それに、みんなが怖いって言ってた時のマスターはとても悲しそうでした。なら、せめて私だけでもマスターの傍にいて、笑顔でいてくれるように努力します。

今回は失敗してしまいましたし、マスターについて全然知らない私ですけど、それでもマスターの役に立てるようになれば……きっと）

「ん？ どうした、アル？ ほら、行くぞ」

フィードの役に立とうと考えてる最中、声をかけられたせいか、アルは驚き、つい思ってもないことを口にしてしまった。

「マスターは駄目駄目マスターですね。私がしっかりしないと」

そんなアルにフィードは苦笑し、

「んな事言っなって。お前の面倒見てるの俺なんだから」

と返事をし、二人は町長の元へと向かって歩き出した。

訪れた平穩

町長の元に向かい、今まで下町に起こっていたこと、そしてその裏で何が起こっていたかをフィードたちが話し、騎士団が下町へ派遣されてから約一日が経った。

十二支徒が今回の事件にかかわっているとあって、普段はいない大勢の騎士が真面目に下町の警護に付いているのを、当の下町の住人はあまりに見慣れない光景に驚いていた。

それでも、町長が事情を説明したことで、どうにか納得しているのか、じろじろと騎士団員を遠巻きに眺めては、ようやく戻った穏やかな生活を過ごしていた。

そして、結果だけいえば、フィードが話した十二支徒の件は騎士団が解決したという形で落ち着くことになった。

話を聞いたクルスやグリーンなどはこのことに激怒していたが、フィード自身はそれでいいと納得している。

仮に、フィードがこの件を解決した本人として名乗りを上げたとしても、下町の人々は歓喜するが、中階層、上階層の人々がこの国の騎士団たちの力に疑問を持ち、いらぬ問題を引き起こしてしまう可能性がある。

それに、十二支徒をたった一人で撃退し、浮浪児を奴隷として売りさばこうとしていたフラムの元騎士団副隊長を捕縛したとあっては、まさに一騎当千。

そんな力が下町にあるというだけでも、いつ反乱が起こっても仕方がないと思うような人も出てくるはずなのだ。

それは、身分が高く、権力に捕らわれているものであれば、より顕著に現れてしまう。

だからこそ、下町での火事を止め、盗賊を捕まえたのをフィードとし、その裏で暗躍していた十二支徒たちを撃退したのは騎士団であつたということにすることで話は着いた。

しかし、悲しいことに昔から人の口に戸は立てられないという。眞実はさまざまな尾ひれがつきながら広まり、フィードの名は結局セントール中に湾曲しつつも広まることになった。

「はあ……。まったく、何でこんなことになったのやら」

レオードの酒場で酒を口に運びながら、フィードはため息をついた。カウンターでのんびりと酒を飲む彼の周りには既に酔いつぶれた下町の人々の山が積み重なっていた。

「そんなこというなってフィード！ いやあ、俺は今回のお前の出来事で実に晴れやかな気分だ。見たか、あの騎士団の連中の顔！俺たちに出し抜かれたのが悔しいのか、自分たちが何もしなかった自覚があるからか、どれだけ文句言っても何も言い返さないんだぜ。日ごろの鬱憤を晴らすいい機会だ。ざまあみやがれ、くそつたれども！」

かなり酔いがまわっているのか、フィードの傍に来たクルスは陽気な様子で語る。

「わかった、わかったからクルス。お前も、もう山のように積み重なっているやつらの仲間入りして来い。いいか、言っておくがその話はこれで五回目だ！」

お前が騎士団に対してどれだけ不満が溜まっていたかはもうわかったから、これ以上うつとうしい絡みを俺にするんじゃないねえ！」

肩に腕をまわすクルスの腕を解き、フィードは文句を言う。

「おっ？　そうか、そうか。お前は今日の主賓だもんな。他のやつらに話を聞かせないといけねーよな。おーい、みんな！　フィードが十二支徒を追い払ったときの話を聞かせてくれるってよ！」

その言葉に少ないながらも酒場において、まだ意識のある数名が「おおっ！」と返事をする。おそらく、彼らもクルスが何を言っているかなどもう理解できていないが、とりあえず返事をしただけであろう。

「本当に、どうしてこうなった……」

その光景を見てフィードは思わず頭を抱えた。そもそも、何故こんなことになったかといえば。

今朝、フィードたちの元に来た騎士団が事情を聞き、今回の件の手柄を譲ってもらえないかと提案し、それをフィードが承諾したことから始まった。

町長の家で話をしていたフィードはその話をクルスに聞かれ、宿に帰ってグリーンに改めて事情を説明していたところ、

『あいつらふざけやがって！　フィード、今日は飲むぞ！　下町のやつら呼んでオッサンの酒場に集合だ。金の心配はするな。今日は親父の金庫からかつぱらってきた金で飲み明かすぞ！』

と言って、仲のよい下町の若者や、酒場の常連をクルスが呼んで来たせいである。結局フィードも無理やり酒場に連れて行かれ、こうして主賓という体のいい飲みの目的として使われて散々酒を飲ま

されることになった。

とはいっても、フィードはアルコールがほとんど回らない体質なので、他のものが次々と脱落しているのを呆れながら眺めて、ちまちまと一人で酒を飲んでいるのだった。

「まあまあ。そんな文句ばつかたれんじゃねえよ。いいことじゃねえか、下町がこんなに活気に満ちるのは久しぶりなんだぜ」

カウンター越しにレオードがフィードに話しかける。他の客から散々酒を飲ませられたためか、彼の顔も薄っすらと赤みを帯びている。

「いいのか、オッサン。酒場の店主が仕事放って酒ばつか飲んでて」

「ばかやろう！　こういうもんはな、時と場合によって臨機応変に対応するのが酒場の店主つてもんだ。今日なんかどうせ仕事にならねえ。片付けはこいつらが起きたあとにやらせればいい。そうなる」と俺の仕事は客から貰った酒を飲むだけってことになる」

酔いが回っての冗談なのか、それとも本気でそう思っているのかわからないフィードはただ一言、

「ひでー店主だ。そのうちこの店も潰れるな」

と呟くのだった。

一方その頃、グリンの酒場ではアルが帰りの遅い主を待っていた。

「遅いです。夕方には帰ってくると思っていたのに、マスターまた約束を破りましたね。もう夜ですよ。どうせ酔っ払って寝こけてるに違いありません。そうだとすれば、そろそろ迎えに行かないといけませんね」

と、ぶつぶつと独り言を呟き、その様子をグリーンが微笑ましく見守っていた。

「アルちゃん。その台詞もうこの一時間の間で三度目よ。そんなに心配なら様子を見に行くだけ行って来たら？」

グリーンとしても今の言葉の後半部分を言うのも 三度目なのでもうこれ以上は言わないと決めているのだが、そんなグリンの言葉にアルは、何故か過剰に反応し、

「いえ！ 別に私はマスターのことが気になっているわけではありません。そもそもマスターは人様に迷惑かけてばかりいるんです。この前の硬貨袋の件もそうです。緊張感が足りません！」

「いや、それは私が悪かったんだけどさ」

そう言って、アルのすぐ傍から答えるのは、短めの黒髪に、茶色の瞳をし、アルの服の余りとグリーンから貰ったエプロンを身につけている少女、イオだった。

「そうです！ そもそもあなたがあんなことをしなければ……。と
いうか何故あなたはさも当然のようにここにいるのですか！」

アルの糾弾にイオは頬を掻き、苦笑いを浮かべながら、

「いや、だってね。私にはあんたの主、フィードに恩が有るし。かと言って恩を返そうにも、あたしには家も働き場所もなかった。さて、どうしたものかと思ったところを、そこにいるグリーンさんが住み込みで働いてみないかって提案してくれたからさ……」

結果だけいえば、昨夜フィードが町長に騎士団の要請をしたあと、グリンの宿にゲードを連れてきたことによってイオは奴隷から解放されたのだ。

『ほら、お前へのプレゼント。煮るなり、焼くなり、刺すなり、あの程度は好きにしろ。ただし殺すなよ。こいつ騎士団に引き渡すんだから』

そう言つてイオの前にフィードはゲードを差し出した。捕縛魔術で抑えられたゲードは今まで散々こき使ってきたイオを目の前にしてひどく怯えた。

『頼む、命だけは。命だけは助けてくれ！』

ゲードを許すつもりはなかったが、あれだけ威張っていたものがここまで情けない姿を見せると、今までの仕返しとして凄惨な目に合わせるのも馬鹿らしくなってしまう、イオは結局蔑んだ目でゲードを見下し、その鼻っ面に一発だけ思いつき蹴りをかまして、

『さっさと私の烙印の契約を解除しな。……言っておくけどもうあなたの命令は届かないようになってるからな！』

と脅迫に近い契約解除を申請した。烙印と聞いて一瞬だけゲードの表情に余裕が戻ったが、イオから命令が届かないと宣告され一気に青ざめてしまった。おそらく、烙印に命じて自分を助けるように

命令するつもりだったのだろう。

このあと、ゲードの契約解除によってイオの烙印は消え、イオは晴れて自由の身となった。

それは、他の少年少女たちも同じで、彼らもまた、浮浪児であつたため今後の生活先などは騎士団がバックアップとなり働き場所を提供することを約束したのである。

「はゝあ。それにしてもフィードってホントお人よしだね、こんな金にも得にもならないようなことやつてさ」

「なっ！ それはマスターのことを馬鹿にしてるのですか？ まあ、おおむね私も同意見なのであまり言うこともありませんが……」

「いや、でもさ。そのお人よしのところがまたいいって言うかさ。あゝヤバイ。私あの人に惚れちゃったかも」

頬を赤く染めてボソリと呟くイオに、アルは、

「な、な、なっ！ そんな、マスターなんか惚れてもいいことなんてありませんよ！ お人よしですし、お金にならない仕事ばかりしますし、人のことを平気で数日放つてどこか遠出にでかけますし……」

「じゃあ、なんであんたはフィードと一緒にいるのさ？」

「それは……。私はマスターの奴隷ですし。そう、奴隷！ だからマスターの傍を離れるわけには行かないのです。マスターの傍にいるのは私だけで十分です。他の人の手は借りません！」

「ふうん。あのフィードが奴隸を取るなんて思わないけどなー。どうせ、名目上の奴隸ってだけで命令とか一度もしてないんじゃないの?」

元奴隸で、フィードの奴隸に対しての接し方や、実際に助けてもらった経験からイオはアルの矛盾に斬り込んだ。

「そ、そんなことはないですよ?」

この手のやり取りに慣れていないアルはすぐにボロが出た。というより、さっきから目がずっと泳いでいた。

「どうだか。まあ、奴隸なら別に主と他の女が何してようと文句なんて言わないよね? だって主に逆らうなんて奴隸じゃないもんね」

クスクスと口元を抑えて笑いを堪えながらイオが呟く。

「それは普通の奴隸と主人の話です! 私の場合は駄目なマスターに代わって私がしっかりとマスターの面倒を義務があります。それは性悪な女をマスターに近づけないということも含まれます」

「ホント、減らず口の多いやつね。私あんなこと嫌いだよ」

「奇遇ですね、私もあなたのことが嫌いです」

バチバチと火花を散らせながら視線を交わらせる二人。そんな二人を眺めて、グリーンは「あら、フィードさんも罪な男ね」とこの状況を楽しみながら独り言を呟くのだった。

結局二人の言い争いは、その後フィードが宿に帰ってくるまで続いた。

夜半の知らせ

『どうしてですか？ どうしてわたしにそんなことを言うのですか？！』

広々とした荒野には青年と一人の女性の姿しかない。何が起ころうともいいように青年が人払いの結界を張り、人を寄せ付けないようにしたのである。

『わかってくれ。これがお前にとって一番いい選択なんだよ』

苦しそくに顔を歪めながら、言葉を吐き出していく青年。だが、女性はその言葉を受け入れるわけにはいかなかった。

『ずっと、これまでずっとあなたの傍にいました。確かに最初は足手まといで、あなたは口に出しませんでしたが、本当は邪魔な存在だったかもしれません。』

でも、今は魔術も覚えましたが、剣技も、知識も磨きました。それでも駄目なのですか？ あなたの傍にいてはいけないのですか？』

女性の悲痛な叫びに青年はただ、黙って目を逸らすしかなかった。

『だから、駄目なんだよ……。それだけの才能が有るから……。』

女性には決して聞こえないよう青年は呟く。

『本当に、駄目……。なんですか？』

再三の女性の懇願にも青年は首を振って拒絶の態度を貫き通した。

『ああ、駄目だ。お前は俺みたいなやつの傍にいちや駄目なんだ』

お互いの意見はとうとう妥協点を見つけないでなくすれ違ったまま終わった。

『そう、ですか。なら、わたしと勝負してください。わたしが勝てば、あなたの意見は認めません』

腰に下げていた片手剣を鞘から抜き放ち、女性は青年に向かって構える。手を一切抜かない戦闘態勢に入った証拠に殺気が青年の肌を突き刺している。

『ああ、わかった。だが、俺が勝ったら無理やりにもお前をフラムへ連れて行く』

そう言って青年も剣を抜き放ち、女性に向かって構える。

静寂が場を支配した。お互いに剣を構えたまま、最初の一撃を決めるため、相手の隙を窺っている。両者動かずそのまま時が流れると思われた中、先に動いたのは女性のほうだった。

『ハアアアッ！』

女性は鍛えあげた脚力で一気に青年との距離をつめ、上段から剣を振り下ろした。青年はそれに合わせるように中段から剣を振り抜いた。

『悪い……リーネ』

剣と剣がぶつかり合う寸前、青年がそう呟くのを彼女は確かに聞いた……。

「あ、あああああああああつ！」

夢を見ていた。懐かしいというにはまだ早い、苦い思い出の夢。一年ほど前、フラム近くの荒野で『彼』と戦い、そして敗れた苦い記憶。

「なんで、またこんな夢を」

身体をびつしよりと濡らしている汗を室内に置いてあつたタオルで濡らし、ふき取る。ひんやりと冷たい感触が荒れていた心を落ち着けた。

「どうして、今になって。せっかくここ数ヶ月は見ないようにしたのに……」

今現在自分がいる部屋を見渡してリオネは呟く。

広い、というにはそこまでの広さはないが、一人が暮らす分には、なに不自由しない部屋である。雑務をこなすための机や、休眠を取るためのベッド、そして女性ということからか配慮されておかれている浴槽。改めてみると十分以上といえるであろう待遇がなされている部屋だった。

だが、それもリオネの肩書きであるフラム騎士団第九隊副隊長という身分を考えれば当然のことかもしれない。他国にまでその名声が届くフラムの騎士団で腕の立つ女、それも副隊長という階級な

のだ。個室が与えられて当然だ。

当然、他の隊も副隊長から個室が与えられるので、格別リオーネが特別なわけではない。

夢見の悪さから、すっかり目が覚めてしまったりオーネはいつもの服装に着替える。それは、本来騎士が着るような軽量の鎧姿でなく、足にまで届きそうな長めのロングコートにズボンという、騎士であるといっても信じてもらえないような服装だった。

しかし、彼女にはその服装で行動することが認められており、実際これまでの功績もこの服装で打ち立ててきた。身体強化魔術が使える、実力のある彼女にとって鎧は逆に自分の行動を遅らせることになる重石でしかないのだ。

彼女のほかにも鎧を使わないでいる騎士団員はいるが、ほとんどのものは礼儀として普段は着用している。だが、彼女にとってはこれが長年の経験から身体に染み付いた一番いい戦闘スタイルで、普段着としても使えるため普段からほとんどこの格好で行動している。

少しは落ち着いたりオーネだったが、どうにも眠気が覚めてしまったため、夜風に当たろうと部屋を出て騎士団の宿舎を歩くことにした。

見張りのため巡回する騎士に挨拶を交わし、中庭に辿りつく。冷たい夜風に当たりながら、晴れた夜空を見上げ、煌びやかに輝く星を眺める。

「おや、こんなところで一人で何をしているんですか？」

声をかけられたことに一瞬気づかず、視線を上から声のした先に向けると、そこには柔和な笑みを浮かべた中年男性が立っていた。

年のせいかな、限界まで鍛え上げていた筋肉は少し衰えの兆しを見せ、それでもまだ力強い体格を保っている。暗闇では少し目立つ金色の髪も所々色素が抜け始め白く染まっている。たれている緑眼は人のよさそうな相手だなと思わせる要因の一つだ。

「いえ、少し眠れなくて……。隊長こそどうして？」

隊長と呼ばれるのはリオネの所属する第九隊隊長グライドのことである。

「僕の場合は少しエルロイドさんと話をしていましたね。それで今彼の部屋から戻ってきたところなんですよ」

疲れているのか、力なく笑うグライド。鎧を着ていなければ、彼を見て騎士団の一隊長だと思う人より、無駄に身体を鍛えた農夫だと言われて納得する人のほうがきつと多いだろう。

「エルロイドさんと、一体どんな話を？」

どうせ眠れないのだ。情報を共有する面でも暇を潰すという面でも都合がいいと思ったりオーネは問いかけた。

「いえ、恥ずかしい話なんですが僕の隊の元副隊長。君の前任だった人なんです、その人がセントールで事件を起こしてしまいました。しかもよりもよって十二支徒と手を組んで」

十二支徒という単語にズキリと胸の奥が一瞬痛んだ。それは『彼』を辿る道標の一つだったからだ。

（我ながら未練がましいな……）

もう忘れたはずだと思いを切り替えてグラードに話の続きを促す。

「それですね、事件自体は向こうの騎士が解決して事なきを得たのですが、元とはいえ我々フラム騎士団の隊員だったものがそんな犯罪を起こしたとなれば市民の信用は一気になくなってしまいます。もちろん、この話は公表されますが、市民の信用回復、それとセントールの人々の悪印象を払拭するためにも、騎士隊から一隊を選んでセントールへと派遣しようという話を持ち出されたんですよ」

「なるほど。では選ばれた隊はセントールに滞在し、人々の助けとなり、失われた信用を回復。そしてフラムへの印象をよりよくしようというのですね」

リオネの返答にグラードは満面の笑みになった。

「正解です。それで、不始末を起こした元隊員がうちの隊だったということもあって、真っ先に僕に話が来たんですよ」

「わかりました。それで、隊長はその話をもうお引き受けになったのですか？」

「いえ、まだですよ。副隊長である君に話を通しておこうと思います。明朝には他の隊にもこの話が伝わると思うので、できれば早めに伝えておきたかったですよ。いやゝ起きていてくれて助かりました」

あまりに楽しそうに話すグラードの様子なので、リオネは不思議に思い、

「なぜ、そんなに楽しそうに話をするのですか？ 元隊員のしたことです。我が隊の信用が一番なくなってしまったのですよ？」

と尋ねた。しかし、グラードはそんなことはまるで気にした様子もなく、

「信用は大変ですけど、僕たちの頑張り次第で取り戻すことができますよ。そんなことよりもっと重要なことがあるんですよ」

言っている意味が分からず、リオーネは首を傾げた。

「これはセントールで噂になっていることなのですがね、実は今回の事件を解決したのは騎士たちではなく一人の青年だという噂が流れているらしいんですよ」

それまで殆ど雑務として淡々と話を聞いていたリオーネの目の色がその一言で変わった。それを見て更に満足そうな笑みを浮かべて話を続けるグラード。

「どうも、その青年はここ数ヶ月セントールに滞在しているみたいで、名前はええと、何だったかな。フ、フィー？」

「フィード……ですか？」

「そうそう、そんな名前だったかな。いや、たった一人で十二支徒とフラム騎士団の元副隊長を相手にするなんて、それこそあの『復讐鬼』でもないとできませんよね。」

まあ、噂に色々と尾ひれが付いているのでどこまでが真実なのかはわかりませんが……」

新しい玩具を与えられた子供のようににはしゃぎながら話すグラード。しかし、この時既にリオーネの耳にグラードの言葉は入っていなかった。彼女の頭にあるのは、ただ今まで分からなかった『彼』の居場所が分かったということ、そしてそこに自分が行く機会があるということだけだった。

（『彼』が、いる。ようやく、ようやく見つけたっ！）

心は喜びと怒り、憎しみ。それらが入り混じりドロドロとしたものでかき乱されていた。

「それですね、僕は一応隊長なのでそう軽々とフラムを離れるわけにも行きませんし、いざ派遣するとなると副隊長を中心として派遣することになるのですよ。といっても、この話はまだ僕のところには来ていませんけどね。」

でも、明日になれば他の隊が派遣の希望を申し入れるかもしれません。自分たちの隊の信用を高めることにもなりますし、他国へのいい宣伝にもなりますからね。でも、今ならまだ誰も知りません。エルロイドくんも起きているでしょう。

それで、どうします？ 隊長はここを離れられないので副隊長の君に決めてもらおうと思うのですが」

問いかけるグラードに、リオーネは一瞬も迷うことなく答えた。

「はい！ 我が隊が派遣の要請を承ります。元隊員の犯した不始末は我が隊の働きによって払拭して見せます」

その答えに、グラードは今迄で一番の笑みを浮かべるのだった。

二人の看板娘

下町での騒ぎから早くも一ヶ月の時が過ぎようとしていた。十二支徒の出現と、その撃退。普段は下町の役に立たない騎士団が真面目に下町の警護に勤しんでいる姿を最初は物珍しげに誰もが見ていたが、一週間も経てばそれが普通だと慣れてしまった。

最初は十二支徒がまだ消えていないのではないかとの緊張感もあり、張り詰めた空気が漂っていたが、それもまた時間の経過と共に少しずつ消えていき、穏やかな毎日がただ過ぎていくだけだった。

それはフィードとアルにも当てはまることであり、

「アル。今日はちょっと中階層の方に行くけれど、お前も一緒に来るか？」

起床し、着替えを終えたフィードが同じく着替えを終えたアルに問いかけた。

「すみません、マスターのせつかくの誘いなのですが、今日もグリンさんの手伝いをしようと思います。それよりもマスター……仕事はしなくていいのですか？」

事件以後、仕事をしている姿を見ていない自分の主に不安の視線と言葉を投げかけるアル。

「うーん。今は特にしなきゃいけない仕事……というか依頼は来ていないしな。お金もこの間の件で騎士団から口止め料としてもらった分と町長からの依頼達成の報酬がまだ余ってるし」

そう言ってフィードは机の引き出しから硬貨袋を取り出し、アルに見せた。

十二支徒を撃退したのは騎士団ということにして欲しいと頼まれた際、フィードはさまざまな理由からそれを承諾した。しかし、あまりにもあつさりと承諾したため、騎士団側が不審に思ったのか、口止め料として多少の金銭を黙ってフィードの元に送り届けてきたのだ。

とはいえ、フィードは既に今回の件を親しいものに話しており、クルスなどを通じて下町の人々の耳にも真実は伝わっていたため、口止め料は意味をなさなかった。

かといって、わざわざ貰ったものを相手に付き返すほどフィードの懐は暖かくなかったため、ありがたくもらっておくことにしたのだった。

それに加えて、町長からきちんとした報酬を貰ったため、今までに比べて少しはお金に余裕があるのだ。特にやらなければならぬような依頼もここ最近はなかったため、下町での些細な出来事の手伝いをしたり、中階層の人々が住む地区に足を伸ばすなどしていた。要するに、ここ最近のフィードは暇をもてあましていたのだ。

対してアルはというと、グリンの料理を食べにきたという名目で、噂のフィードを見に来たという人々の相手を毎日忙しくしていた。

元々お客であるアルはそこまでして手伝う必要はないのだが、二つの理由から、どれほど忙しくても手伝うことを決めていたのだ。

一つは、宿の主であるグリンが大勢の人の料理を作らなければならない、一人では対応できないと分かっていたため、普段お世話になっているお返しという意味も込めて手伝いをするということ。

そして、もう一つ。実はこっちが本当の意味で手伝いを続ける理由なのであるが……。

「おはよう！ フィード、起きてる？ もう朝食できてるよ」

静かな雰囲気が漂う室内の空気を打ち壊すかのごとく、勢いよく部屋の扉が開いた。そして、開いた扉の前には、一ヶ月前からこの宿で働くことになったアルよりもほんの少しだけ年上の少女の姿があった。

「おはよう、イオ。相変わらず元気だな。だけど、ノックもなしにいきなり扉を開けるなよ」

突然のことに特に動揺するわけでも怒るわけでもなく、フィードは半ば呆れながらイオに注意した。

「いやゝごめん、ごめん。でも早く朝食食べて貰いたくて。今日の料理は私も手伝ったんだよ！」

興奮気味に話をするイオ。アルと違い、客ではないイオは朝食の準備や各部屋の掃除などアルがしない仕事もしているのだ。

「そつえば、お前最近グリーンさんに料理の仕方とか教わっていたな」

「そつだよ。最近になってようやく料理の手伝いをさせてもらえるようになったんだ。といっても、まだ下ごしらえとかしかさせてもらえないけどね」

陽気な笑みを浮かべてイオは答える。その表情は一ヶ月前とは比べ物にならないほど多彩な表情を見せるようになっていた。

一ヶ月前、十二支徒のログと手を組んでいたフラムの元騎士団副

隊長であるゲードの奴隷として、浮浪児を捕まえて奴隷とするという目的の陽動として下町の金品を盗み、民家に火をつけるなどといった事件を起こしていたイオはフィードによって捕まり、その後ゲードの奴隷から解放された。

自分の命を守るため、仕方がなかったとはいえ、被害を受けたものがそれを許すかといえば話は別だ。償いとしてイオは自分が働いて得られる給金を被害にあつた人に全額渡すということになった。

奴隷から解放されるまでは、心が追い詰められていたため、表情も暗く、変化も乏しかったイオだが、フィードに助けられてグリンの元で働くようになってからは明るい表情が増えていった。彼女と仲の悪いアルも、同じ経験があるため、そのことについてはよかったと思っていた。

明るい表情が増えた理由がフィードになければ……。

「へえ。でも頑張ってるじゃないか。そのうちイオが厨房を任されて料理を出すなんてことになるかもしれないな」

「まあ、そうなるのが理想だけど。やっぱり一から始めたことだから下ごしらえでも大変で」

謙遜するイオにフィードは優しく伝える。

「いや、それだけ一生懸命になれるならすぐにうまくなるさ。これからも頑張れよ」

褒め言葉と共にイオの頭を撫でるフィード。頬を掻き、照れながらもイオは黙ってフィードに撫でられていた。

そんな微笑ましい空気の二人を見て、不機嫌になっている人物が一人いた。

「むむむむ」

二人の隣でその様子を見ていたアルだ。湧き上がる嫉妬と羨望。ここ最近あまりフィードに褒められていないアルは、頭を撫でられているイオが腹立たしくもあり、同時に羨ましくもあった。しかし、それを態度に出そうとはしなかった。態度に出すことでフィードに子供だと思われなくなかったのである。

そんなアルの様子に気が付いたのか、イオはニヤリと勝ち誇った笑みを浮かべ、アルを挑発する。

（なんですか、その笑みは。マスターに褒められたからって調子に乗って……。私だって、頑張ったときは褒めてもらってるんです。その程度の挑発はなんとも思いません）

挑発に乗らないアルを見たイオは、その態度が気に入らなかったのか、次の手に移った。

「フィード。くすぐつたいよ」

それまで何も言わずにただ撫でられていたイオがフィードに訴える。

「ん？ 悪い、悪い。嫌だったか」

とつさに手を離れたフィード。離すことまで予想していなかったイオは名残惜しげにその手を眺めていた。

「うっん、嫌じゃないよ。フィードがよければだけどき、私が頑張ってるなと思ったときでいいから、またこうして褒めてくれる？」

上目遣いで懇願するイオ。特に断る理由もなかったフィードは、

「こんなのでよければいつだってしてやるぞ」

と、そのお願いを承諾した。その返事を聞いたイオは小さく手を握り締めていた。そして、またもやアルの方を向き、自慢げにしていた。

これにはさすがのアルも腹が立ったのか、

「マスター、早く朝食を食べに行きますよ！ 早くしないとせつかくの朝食が冷めてしまいますから」

とフィードの手を引いて部屋を出て行った。

「おい、アル。お前なに怒ってるんだよ……」

頑張っている子供を褒めたという程度のことしか思っていないフィードは、何故アルが怒っているのか分からず、ただ必死に自分を引っ張る少女に合わせて部屋を出るしかなかった。

「あんたは今日もここで手伝いをするの？」

そんな二人の後に続いて歩くイオは前を歩くアルに尋ねる。

「ええ。誰かに手伝いを任せるとグリーンさんが大変そうだと思うので」

「そうなの？ お客なんだから手伝いなんかしてなくていいのに」

フィードを挟んで火花を散らす二人。アルがグリーンを手伝うもう一つの理由がこれである。

イオがフィードに好意を持っているということをアルは既に知っていた。そんな彼女がアルと同じように働き出し、先程のようにフィードに褒められるようになった。

色々と背伸びをしても、まだまだ子供なアルは、自分の居場所を取られると思い、イオに対抗して今まで以上にグリーンの手伝いをするにしてみたのだ。

それは自分がフィードに褒めてもらいたいということもあるが、イオに負けたくないという気持ちから張り合っているのだった。

イオとアルの二人は知る由もないのだが、二人が張り合い、きつちりと仕事をこなしているため、フィードを見に来た客の一部が彼女たちの働く姿に惚れ、その姿を見にこようと食事を取りに来るようになっていた。

こうして、二人は知らぬ間に宿の料理を食べに来る常連客を増やし、看板娘としての地位を着々と築いていたのであった。

かつての少女と今の少女

朝食を食べ終わったフィードは、宿を出て中階層の住人が住む地区に向かっていた。中階層に向かう際、見知った顔の下町の住人に声をかけられ、雑談を交わしたりもした。

彼らの話す内容はほとんど同じもので、今下町の警護をしている騎士隊の代わりに、フラムから騎士隊が派遣され、しばらくの間下町の警護に付くというものだった。

剣の国と呼ばれるフラムは、騎士の発祥の地でもある。そのため、セントールのような騎士団と違い、真の意味での騎士道精神に溢れる騎士によって騎士団が成り立っている。

その噂は自国にとどまらず他国にまで名声が響くほどであり、騎士団員の高潔さや慈悲深さ、民衆に対して分け隔てなく接するその態度には、彼らに守られる民衆の中から騎士団を崇拜する者も出てくるほどのものだそうだ。

そんな本場の騎士隊が来るとあっては下町の人々だけではなく、中階層や上階層の人々までも噂を聞いて、浮き足立っていた。

噂によるとフラムから派遣される騎士を率いるのは騎士団第九隊副隊長のリオーネという女性騎士だと言う。この一年で急に現れた彼女は、短期間の間にさまざまな事件を解決したり、民衆への態度やその実力からあつという間に副隊長へと昇進した女性だ。

まさに時の人。そんな人物をお目にかかれるとあっては誰もが彼女が訪れるのを心待ちにし、そわそわと落ち着きのない様子なのも納得がいく。浮き足立つのも仕方がないだろう。

ただ一人、フィードを除いて。

これは誰にも言っていないのだが、一年前、とある事情からそれまで一緒に旅をしていたリオネをフラムへ置き去りにしたフィードとしては、今回の出来事はあまり歓迎するべきものではなかった。もちろんそれはフィードがリオネと知り合いだということがバテて面倒な事態になるのもあるのだが、まず第一に彼女に対する罪悪感から彼女に会う事を避けていた。

（もしリーネに会ったら、まず最初に俺を怒鳴りつけてきて、次に剣で刺してくるんだろうな……）

恨まれるようなことをしたのだから、そのような行動を取られても仕方がないと内心で諦める。下町にいる以上、どちらにしてもリオネと顔を合わせることになるのだ。例え気配を消していても、リオネならフィードを見つけることなど造作もない。

（会ったら絶対に嫌な空気になるだろうし、それにアルのこともあるしな……）

今現在自分と一緒にいる少女のことを思い浮かべてフィードは頭を抱えた。自分のこともそうなのだが、下手をするとアルにまで怒りの矛先が飛び火する可能性があるのだ。

それは、今朝アルが思っていた『自分の居場所』というものが関係してくる。

（リーネにとって家族は俺一人みたいなもんだっただけ。今はきつと騎士団の連中と上手くやってると思うからもう違うんだろうけど）

リオネにしてみれば、今のアルはかつて自分がいたはずの場所に割り込んできた無粋な相手と思われても仕方がない。もちろんフィードはそんな風にしかたなくてアルを引き取り、一緒に過ごしている

わけではないのだが、フィードがそう思っているからといって、リーナーもそのように思うわけではないのだ。

考え事に耽っていて気が付かなかったが、いつの間にかフィードは下町の地区を超えて中階層の地区に足を踏み入れていた。そのことに気が付いたフィードは、考えるのを止め、辺りを見渡した。

下町に比べ、一つ辺りの面積や敷地の広い家屋。清潔さや高級感が漂い、下町にはないような少し割高な工芸品やアクセサリーといった店が軒並み並んでいる。

通りを歩く人々の表情はどれも明るく、身につけている衣服も、使いまわされて色が落ちた下町のものと同じ、綺麗で色とりどりのものが多い。

「やあ、そこのお兄さん。ちょっとうちの店の商品見ていかないか？」

男勝りな喋り方をする女性店員が、店の前からフィードに声をかけた。見るとその店は女性向けのアクセサリー店で、男一人が入るには少々敷居の高いところであった。

「わざわざ声をかけてくれて悪いんだけど、俺はこういったアクセサリーに縁がない男だよ」

断りを入れて、そのまま先へ進もうとしたフィードだったが、女性店員は店にフィードを引き込みたいのか、わざわざ前に立ちふさがり、進行方向を防いでまで話を続けた。

「いやいや。お兄さんはこういったものを好まないかもしれないけど、お兄さんの周りの女の子へのプレゼントとしてはどうかな？ 意中の女性とかいるんじゃないの？」

そう問いかけられるが、フィードには意中の相手は一人もいない。気にかけている女性は数人いるが、いずれも保護者的な立場から気になっていただけである。

（そういえば、最近アルになんにもしてやれていないな。あいつここ最近グリンさんの手伝いで忙しそうだし……）

ふと脳裏に浮かんだのは今朝も忙しそうに料理を運んでいた少女の姿だった。一緒に朝食を食べた後、すぐさま仕事の手伝いを始めたアルはどんどん増えていく客の対応にてんてこまいだった。

アルとは違い、食事を終えてもやることがなかったフィードはそんな一生懸命に働くアルの姿を見て心穏やかな気分になっていたのだが、じつと見られていたことに気が付いたアルに、

『そんなにじつと見られると、仕事に集中できなくなります。食事が終わったのなら早く出てってください！』

と言われて宿から追い出されてしまった。アルからすればフィードに自分の働いている姿を見られるのが恥ずかしかったのだろう。

「あれ」。黙ったつてことは少なくとも気になつてる人はいらんだ。うん、いいね。そんなお兄さんにいい商品があるんだよ。ほら、付いてきて！」

少々強引にフィードの手を掴んで店の中へと連れて行く女性。その一生懸命な姿に今頃同じように頑張っている働いている少女の姿を重ねたフィードは、無理やりその手を振りほどく気になれなかった。

「お父さん、お客さん確保したよ！」

店内に入り、店番をしていた父親に嬉しそうに報告する女性。フィードと娘の一部始終を見ていたのだろう、少し申し訳なさそうに頭を下げてきた。

別にまだ商品を買うと決まったわけではないので、頭を下げられると困るのだが、フィードもつい相手に頭を下げ返してしまう。

だが、嫌な気分にならないのはきつとフィードもこの父親のような気持ちで常日頃過ごしているからだろう。

お互いに苦勞しますねという意味を込めてフィードはもう一度頭を軽く下げた。

「ほらほら、お兄さん。女の子はたとえ安物でも心のこもったプレゼントをもらえると嬉しいんだから、真剣に選んであげてね」

少女の中ではフィードが商品を買うという前提で話が進んでいるようだ。そんな少女の様子にフィードは仕方がないなと思いつつも、ちょうどいい機会だと思い、毎日仕事の手伝いを頑張っているアルへのプレゼントを選ぶことにしたのだった。

「アルちゃん、そろそろ休憩にしようか」

朝食を食べに来たお客の波が緩やかになり、店内の雰囲気も落ち着きだした頃、グリーンはアルにそう伝えた。

「えっ……でもまだお客さんいますよ？」

アルの言つとおり、少なくなつたとはいえまだ店内には数名の客がいた。アルが抜けても対処しきれないことはないが、今から数時間もしないうちに昼食を食べにくるお客がまた来るのだ。そうなたとき、もしアルがその場にいなかったらきつと手が足りなくなるだろう。

「いや、いいんだよ。最近忙しかったせいかな私も疲れていてね。今日の昼食はなしつてことにしたの。泊まっているお客さんに出すのは朝と夕方の二回の食事だけだし、元々昼食も時間が余っていたからやっていたものだしね。」

それなのに最近はいードさんやアルちゃんとイオちゃんを目当てにくるお客さんで一杯で時間に余裕もなくなっちゃうわ、食材も人の手も足りないで困つたものよ」

頬に手を当て、ハアと思いたため息を吐くグリーン。よく見ればグリンの目には深いクマができており、顔も少し青くなっていた。

「グリーンさん。もしかして体調悪いんじゃないんですか？」

アルの問いかけに力なく微笑むグリーン。それを見てアルは胸が痛んだ。ここ最近のグリーンは働き尽くめで休む暇もなかったのだ。そのことに今更気が付き、アルは申し訳なくなる。

「わ、私ちよつと何か買ってきます！」

休憩を言い渡されていたアルはちょうどいいと思い、着ていたエプロンを外すと、急いで二階の自室へと駆け上がった。

「あれ？ どしたの、そんなに急いで」

途中、各部屋の掃除を終えて下に降りようとしていたイオとすれ違う。グリンのこともあるので、アルは意地を張らずに返事をした。

「あの、イオ……さん。グリンさんが体調悪いみたいなので、ちょっと様子見てもらっていてもいいですか？ 私、疲れを取るのに効きそうなものを買ってくるので……」

普段呼ばれることのない名前を言われたためか、イオが驚いた表情のまま固まっていたが、真剣なアルの様子を見て、今はふざける時ではないと悟った。

「了解。お客さんの相手とかなでできるだけ私がやっておくよ。グリンさんも無理しないように様子見ておく。雇い主に倒れられちゃ私も困るしね」

舌を出し、おどけながらアルに手を振り、イオは一階へと降りていった。

部屋に戻ったアルは上着を羽織り、机の引き出しに仕舞われている予備の硬貨袋を取り出し、そのまま一階へと勢いよく降りて行った。そのまま外へ出る。

外に出たアルはまず下町の薬屋へと向かった。すれ違う人々に時折ぶつかりながらも、グリンのために必死に走った。

「おや、グリンさんのとこのお嬢さん。いらっしやい、何か必要かい？」

息を切らしながら店内に入ってきたアルに少々面食らっていた店主だが、落ち着いた態度でアルに話しかけた。

「あ、あの！ 疲れとかによく効く薬ってありますか？」

アルの注文に、店主は少しだけ困った顔をした。

「一応メディカルハーブっていうのがあるよ。これを使えば疲労回復にもなるし、健康の維持にもなるよ」

「それ！ それ貰えますか！？」

「いいけど、お金はあるかい？ 実はこれかなり値が張るものなんだよ。うちでも一応取り扱ってはいるけれど本来は中階層や上階層の人が買うようなものだから……。今もっているお金を見せてもらってもいいかな？」

店主にそう言われ、アルは持っているお金を差し出して見せた。

「うーん、これじゃあ全然足りないな。ツケにしてあげるってこともできるけど額が額だから……」

フィードがいれば今この場で支払うこともできただろうが、生憎と今はアルしかない。お金が足りないという事態を予想していなかっただけに、アルは困り果ててしまう。

（どうしましょう……。せっかく疲れが取れる薬が見つかったのに、お金が足りません……。マスターがいてくれたら薬も買うことができるのに、もう、大事なときになんでいつもマスターはいないんですか！）

お金がないのに店内に居座るわけにもいかず、アルは肩を落とす

て店を出た。やり場のない怒りを持って余し、舌を向いて歩いていると、アルの対向から歩いてきた一人の女性とぶつかってしまった。

「ごめんなさい、大丈夫？」

ロングコートにズボンを履いた女性が、俯くアルに声をかける。顔を上げるとそこには心配そうにアルを見つめる女性の姿が会った。背が高く、それでいてすらりとした体格。一見すると痩せて見えるその体格は鍛えられた筋肉によって引き締まっているようだ。アルにはない膨らんだ二つの双丘がその体格に合っていて、女性の魅力をより一層引き出していた。

肩よりも少し長く延びた金髪は後ろで一括りにまとめられており、透き通った青色の瞳は見つめられると引き込まれてしまいそうだった。

こんな綺麗な人がいるんだなとアルが思っていると、返事のないアルをますます心配したのか、

「もしかして、どこか悪いの？」

と先ほどよりも優しい声色でアルの様子を伺った。女性はあると同じ目線で話すためにしゃがみこみ、アルが話をしてくれるのをじっと待っていた。

「いえ、私は別に悪いところはないんです。ただ、日ごろお世話になっている人が体調が悪いみたいで……。その薬屋さんに薬を買いにいったんですけれど、お金が足りないって言われて……」

女性に説明をしている間もますます落ち込んでいくアル。事情を聞いた女性は少し考えるそぶりを見せ、

「そう、お世話になっている人のために……。わかった、少し待っていて」

そうアルに言うなり、女性は今アルが出てきた薬屋の中に入っていた。女性に言われたとおり、しばらくその場で待っていると、

「はい、これ持っていて」

薬屋から出てきた女性が持っていた紙袋をアルへと手渡した。

「えっ！？ これ……」

紙袋の封を開けると、そこには調合されたであろうハーブの粉末が入っていた。それも結構な量で。

「それを飲むと身体の疲れとかよくなるみたい。量も結構あるから、一度で全部使うんじゃないくて、体調が悪くなった時に少しずつ使うといいわよ」

それだけ言ってその場を立ち去ろうとする女性を、アルは慌てて引き止めた。

「ま、待ってください！ そんな、これを貰うわけにはいきません！」

見ず知らずの、それも今会ったばかりの女性にお金を出してもらって、タダで目的のものを手に入れることになってしまった。何故そんなことをしてくれるのか、全く理由が思い当たらないアルは素直にこれを受け取るわけにもいかず、女性に紙袋を返そうとする。

「そう言われても、それはもう買ったものだから店に返すなんてできないわよ？ それに、私が買ったものだから、それをどうしよう……例えばこれが必要としているけど、お金がなくて困っている女の子にあけても私の勝手ってことになるわよね？」

あまりにも身勝手で、お節介で、それでいてものすごくお人好しなその女性の姿にデジャブを感じながらも、納得のいかないアルはその場で頭を悩ませてしまった。

（どうしましょう。きっとこの人はお金持ちかなにかで、きまぐれで買ってくれたのかもしれないです。例えそういった理由で渡してくれたとしても、何もしていない私がこれを受け取るわけには行きません。ですが、今これが必要なのも確かですし……）

悩み続けるアルの姿を見て、女性はクスリと微笑んだ。

「真面目な子なのね。もしかして理由が欲しいの？ それなら……自分のためじゃなくお世話になっている相手に対して必死になっている姿に心打たれたってことじゃだめかしら？」

アルの頭に手を置いて、同じ目線になって話をする女性は優しい笑みを浮かべて、アルが必要としていた『理由』を与えた。断る理由をなくしてしまったアルは素直に受け取るしかなかった。しまい、女性が渡してくれた紙袋をギュッと大事に抱きかかえた。

「そう、それでいいの。人の好意は素直に受け取っておくのが一番あなたみたいな子供は特に……。変に意地を張ったり反抗していると大人になったときに後悔するわよ」

日頃子ども扱いされるのを嫌っているアルだが、この女性から子

供と言われても腹が立つことはなかった。それどころか、子ども扱いされて嬉しいと感じてしまっている部分がある。

（不思議です。他の人ならされて嫌なことも、この人にされても嫌じゃないと思っています）

頭を撫でられることも、子供に扱われることも嫌と感ぜない。言ひ知れぬこそばゆさと恥ずかしさからアルは顔を真つ赤に染めてしまふ。

「ふふふ。それじゃ、そろそろ私も用事があるし、お別れね。それじゃあね」

そう言つて再び立ち去ろうとする女性。

「あの！ 薬ありがとうございます。私、アルつていいいます。この薬のお礼がしたいので、もしよかったらまた会ってもらえませんか！？」

普段よりもはるかに大きな声でアルはお礼の言葉を告げる。その言葉に女性は何食らつていた。そんなことを言われるとは思つていなかったのだろう。

「本当にいい子ね。あなたを育ててくれる人に一度会つてみたいわ。そうね、それじゃあ明日の同じ時間なら予定が空いているから、もしあなたの都合もいいうなら、また会いましょう。またね、アルちゃん」

と、再び先へと進もうとしたところで、ふと忘れていたものを思い出したのか、女性は何の方何顔を向けて、

「そう言えばまだ私の名前を言っていなかったわね。私の名前はね、リオネって言うの。しばらくの間はこの下町に滞在することになると思うから、よろしくね」

リオネはアルにそう伝えると今度こそ振り返ることなく先へと歩いていった。

一人取り残されたアルは、今聞いた名前を頭の中で何度も呟いていた。

（リオネ、リオネ。もしかして、あの人が噂になっている騎士隊の副隊長さんなんでしょうか？ もしそうならさっそく助けてもらいました）

これが、まだ他の騎士が下町に辿りついていない中、ただ一人別の目的を持って一足先に下町へと訪れたリオネとアルの最初の出会いだった。

迫り来る時

フィードが宿に戻ると食事場の椅子に腰掛け、青い顔をしているグリーンがいた。

「ただいま、グリーンさん。顔真っ青ですよ。大丈夫ですか？」

しゃがみこみ、グリンの容態を確認するフィード。心配そうにグリンの様子を伺うフィードに、グリーンは力なく微笑み、

「ああ、大丈夫だよ。アルちゃんとイオちゃんにも同じように心配してもらってね。アルちゃんは高いのに薬まで買ってきてもらって、今それを飲んで休んだところなのさ」

事情を説明するグリーン。それを聞いてフィードはひとまず安心した。

「わかりました。でも、無理はしないでくださいね。なにか必要なものがあれば俺が買いに行ってきますから」

「そうね、その時はお願いするわ。ごめんなさいね、お客さんにこんな気を使ってもらって……」

「何を言っているんですか。俺やアルはいつもグリーンさんのお世話になってるんです。もうただのお客と店主の間柄ってわけでもないですよ。それと、同じ事をアルには言わないであげてくださいね。」

本人はきつと否定しますけど、アルのやつはグリーンさんのことを家族みたいだと思ってますから。きつとさっきみたいに言われると、寝る前にベッドでひっそりと泣いちゃいますから」

口元に人差し指を突き立て、少しおどけながら内緒話をするフィード。そんなフィードを見てグリーンは苦笑する。

「そこまで頼まれちゃしょうがないね。アルちゃんにはお礼を言うだけにしておくわ。フィードさんもありがとうね。私はあと少しここで休んだら部屋に戻るわ。もう大丈夫だからアルちゃんの所へ行つてあげて。手に持っている、それ。アルちゃんに渡すんでしょ？」

グリーンはフィードの手にある小さな紙袋に目を向ける。そこには少し前にフィードが中階層で買ってきたアルへのプレゼントが入っていた。

「ええ。少し前は俺が、最近はいいつが忙しくしてたせいで、あまりかまってやれなかったんで、そのお詫びと日頃のお礼ということ。まあ、たいした物じゃないんですけど……」

「そんな事言っちゃだめよ。プレゼントっていうのは貰えるだけで嬉しいんだから」

「それ、これを買った店の店員も言っていたな……」

「ふふふ。鈍感なのかわざとそうしているのかは知らないけれど、そう言った気遣いはきちんとしておかないと、後で大変になるのはフィードさんよ」

そう言つてグリーンは立ち上がり、自室に向かって歩いて行つた。フィードは付き添おうと思つたが、心配から過度に干渉するのも迷惑になると思い、その背を見送るだけにした。

「フィード、お帰りなさい。いつの間に帰ってきたの？」

グリーンと入れ替わりに厨房の奥からイオがひょっこりと現れた。

「ただいま、イオ。帰ってきたのはついさっきだよ。あ、そうだ。グリーンさんが今部屋に戻ったから、後で様子を見に行つてあげてくれないか？　かなり体調が悪そうだったみたいだから」

「わかった。それじゃあ、もう少ししたら様子を見に行くね」

「よろしく頼むよ」

グリンの件を伝えると、フィードはイオと別れて二階の自室へと向かった。階段を上がると、箒を持って廊下の塵やゴミを掃くアルの姿があった。下を向いているため、階段を上ってきたフィードの姿にまだ気がついていない。

フィードはそつとアルに近づき、

「よっ！　頑張ってるな、アル。関心、関心」

と背中越しに声をかけた。当然、突然声をかけられたアルは、身体をビクンと震わせて驚いた。

「ふえっ！　ま、ますたー！？　あれ？　いつからそこにいたんですか？」

動揺しているのか、あたふたとしながらアルはフィードに尋ねる。

「まさに今さっき。それよりもグリーンさんの様子見たよ。かなり疲れが溜まっているみたいだな」

「はい。ここしばらく忙しくて休む暇もありませんでしたし、もっと早く気づけたら良かったんですけど……」

肩を落として、落ち込むアル。だが、フィードはそんなアルを見て笑っていた。身近な人の心配を素直にできるようになってくれたことが嬉しかったのだ。

「まあ、それはしょうがないよ。俺も気づけなかったし、アルもそんなに気にするな。それよりも、後で様子を見に行くついでに温かい食べ物でも作って持っていつてあげようか。アルもグリーンさんに料理を教わってるだろ？ 簡単なものなら作れるんじゃないのか？」

フィードの提案にアルはコクコクと頭を振って頷いた。

「よし。それじゃあ、あとで一緒にグリーンさんのお見舞いに行こうな。——っと、そうだ。忘れるところだった」

と、そこまで話し終えてフィードは本来の目的を思い出した。手にしていたプレゼントの入った紙袋をアルの前に差し出す。

「……？ マスター、これはなんですか？」

そのアルはというと訝しみながら紙袋を眺めていた。アルにはフィードが自分にプレゼントを贈るという考えが浮かばなかったらしい。フィードは受け取られることなくアルと自分の間で留まる紙袋を再び自分の元へと引き戻し、その中に入っている中身を取り出した。

「えっと、な。これは、なんていうか……。そう、お前へのプレゼ

ントだ」

無垢な眼差しで自分を見つめるアルに、素直に日頃のお礼としてのプレゼントと言って渡す事が照れくさくなってしまったフィードは、口ごもりながらもその中身をアルへと手渡した。袋の中に入っていたのは女物の赤色の小さな髪留めである。髪留めの根のところには一枚の花びらが細工されており、そのデザインは可愛らしく、まさに少女向けというものであった。

そして、アルはというと、フィードから贈られたプレゼントを受け取ったものの、今目の前で起こったことに頭がまだついてきておらず、ボーッと惚けたままプレゼントとフィードへ視線を交互に移していた。

「あの……。いいんですか？」

既に今日同じようにリオーネから無償の施しを受けているアルはつい遠慮がちになってしまっていた。フィードはリオーネと違って見ず知らずの相手でないのだが、それでも親切にしてもらっただけで自分が何も返す事ができないのは気が引けてしまうのだろう。

「どうした。もしかして、迷惑だったか？」

もつと喜ぶ顔が見られると思っていたフィードは感動の薄いアルを見て、少し気落ちしてしまっていた。それにアルも気がついたのか、慌てて自分の今の態度の弁解をする。

「いえ！ けして嬉しくないわけじゃないんです。マスターからのプレゼントなんです。嬉しいに決まっています。そりゃあ、できれば事前に一緒に買う物を見に行けたらな……。なんて思ったりしましたけど」

行っている途中で恥ずかしくなったのか、アルの言葉は次第に小さくなってしまった。フィードも聞いていて恥ずかしくなったのか、視線を逸らし、

「うん。まあ、喜んでもらえたなら良かった」

と返事をした。それから、しばらく二人の間には沈黙が漂う。しかし、何故か居心地は悪くない。

（あゝ。なんだこの生暖かい雰囲気は。くそ、予定ではこんな風になるはずじゃなかったのに。アルにプレゼントを渡して、喜ぶ顔を見てそれで終わりだったはずだ！それがどうしてこうなった……）

予想外の事態に戸惑うフィードだったが、それもアルの一言によってどうにか意識を逸らす事ができた。

「マスター。よければこれを付けてもらってもいいですか？」

目の前に差し出されるのは今渡した髪留めだった。

「いいぞ。それじゃあ、ちょっと頭動かさないでいてくれるか」

受け取った髪留めを手に取り、フィードはアルの髪を留めるために身長差を埋めるためにその場にかがむ。さらりとしたアルの白髪に手をかけて、髪を掻き分け、髪留めを差し込む。瞳と同じ色をした髪留めは、アルの白髪と相まって更にその存在を際立たせていた。よし、とフィードが一安心し、視線をアルに移すとその顔は思っていたよりもずっと近くにあった。互いの吐息が感じられるくらい近い距離。

アルは熱の籠った瞳でフィードを見つめていた。

「えと、マスター……」

とアルが口を開き、何かをフィードに伝えようとした時、

「あ——！　ちょっと、フィード。それなんなの！？」

階段を上ってきたイオが二人を見て叫び声をあげた。

「なにつて……髪留めだけど？」

「そうだけど、私の分は……？」

アルが付いている髪留めを見て羨ましそうにするイオ。フィードはイオのそんな表情を見て、ほんの少し胸を痛めた。

（でも、これはな。元々アルへのプレゼントってことで買ったわけ、イオが欲しいと言ったからって、買ってやっちゃうとアルの奴が怒りそうだからな）

さすがに、フィードでもその程度の女心はわかるのか、アルとイオとを見比べて、

「悪いな、イオ。今回はアルだけしかないんだ。アルも頑張ってたしな。お前がこれからも頑張っているようなら、その時はお前にも買ってきてやるから。だから、今回は我慢してくれ」

とイオに告げた。イオは悔しそうにしていたが、フィードの言う事に納得したのか、アルを一瞥した後、

「絶対だよ！ 絶対私も買ってもらうんだから！」

と言って逃げるように再び一階へと降りて行った。

そんな慌ただしく動き回るイオにフィードは苦笑し。アルは、フィードが見ていないところで勝利の味を噛み締めて身を震わせていた。

「それじゃあ、そろそろ部屋に入るかな。アルも掃除頑張れよ」

激励の言葉をかけて部屋に戻ろうとするフィード。アルの横を通り過ぎ、自室の扉に手をかけようとした時、アルが伝えそびれていたことを思い出し、フィードに声をかけた。

「あ、そういえばマスター。実は今日グリーンさんの薬を買いに行っただんですけど、持っていたお金が足りなくて薬が買えなかったんですよ。でも、ある人が代わりにその薬を買ってくれて、しかもお金を要求しないで私にくれたんです」

アルに声をかけられたフィードは扉に手をかけたまま顔だけ振り向き、話を聞いた。

「へえ。それはまた親切というか、なんというか。まあ、いい人がいたものだな。でも、いくら何でもタダでものを受け取るだけっていうのも良くないと思うから、またお礼の品か何か持ってその人のところにいかないとな。」

アルは、その人の名前とか聞いたか？」

不思議な事もあるものだと言っフィードは軽く考えていたのだが、次

にアルから発せられた相手の名前を聞いてその表情は凍り付く事になった。

「はい！ それが聞いてくださいよマスター。その薬をタダでくれた人はリオーネさんっていうんです。今度この下町に来る騎士隊の副隊長さんなんですよ！ なんてかまだ他の人たちが来てない中で一人で来ていたみたいですけど、あんなに綺麗でいい人が世の中にはいるんですね……」

その時のことを思い出しているのか、アルはうつとりとした表情で惚けていた。人見知りのアルにしては珍しく、親切にもらった事もあってリオーネのことを気に入っただろう。

しかし、そんなアルとは対照的に、リオーネの名前がアルの口から出た事で、フィードの背筋は寒くなっていた。

（ちょっと待て。いつの間にアルの奴リーネに会ってたんだ？ 幸いリーネの奴もアルの素性については気づいていないから、こんなにアルが楽しそうに話しているんだらうけど……）

二人の出逢いを不安に思うフィードの様子にアルは気がつかないのか、そのまま話を続ける。

「実は、リオーネさんにお礼をする事も含めてまた明日会う事になったんですよ。それで、マスターにも一緒に来てもらいたいんですけど……」

（逃げることはできないってことかもな……）

はしゃぐアルを見つめながら、フィードはリオーネとの再会の時

が迫っている事を自覚した。

夜も更け、人通りを歩く人の姿がほとんどなくなった通りを歩く一人の女性の姿が会った。金髪の髪をたなびかせ、通りを歩く数少ない人の目を引くのはリオーネだった。

いつも通りのラフな格好で歩く彼女を騎士団の副隊長などと思う人はいないだろう。なにせ噂の女性副隊長はその功績や人柄ばかりが町の人々の耳に入っており、その容姿はあまり知られていないからだ。

まして、今はまだ彼女を除いた騎士団員は誰も到着していないのだ。下町の人々が彼女を騎士団の一員ではなく、見慣れない美しい旅人と思ってしまうても不思議ではない。

セントールを訪れたりリオーネだが、宿は取れたものの食事がついていなかったたので、近くにある酒場に食事を足りに來ていた。

酒場に入ると、食事を食べたり、酒を飲んでいる人々の視線が一斉にリオーネの元に集まった。じつと観察するようにリオーネを見つめる彼らの視線に、リオーネが視線を投げ返すと、誰もが目を逸らし、下を向いてしまった。

（なるほど……下町の人々は、見慣れない人に対する警戒心が強いのですね。亡益国と呼ばれるだけあって、どんな人間が紛れるか分からないですし、警戒心を抱くのもわかります。隊のメンバーが来たらこの事を伝えてなるべく早く下町の住人の信頼を得られるようにするように言いつけておきましょう）

仕事中でないにも関わらず、リオーネは騎士隊が早く下町に馴染めるようにする方法を考えていた。仕事熱心というより、仕事に対

して真面目な彼女らしい考えである。

しかし、リオーネは気づかなかったが、酒場にいた客がリオーネから視線を外した理由には、たしかに見慣れない人物に対しての警戒心もあったのだが、それ以上に美しい容姿の彼女と視線を合わせるのが恥ずかしいという理由の方が大きかった。

「いらつしゃい。先に行っておくがお嬢さん、ここはあんたみたいな女性が来るような店じゃないぞ。文字通り女に飢えたむさ苦しい男共しか集まってない。酔った連中に絡まれる前に早く帰りな」

木製のグラスに他の客の酒を注ぎながら、気を利かせたレオードがリオーネに忠告する。他の客達は、その言葉に不満があるのか、野次や罵詈雑言をレオードに投げかける。

しかし、リオーネはにつこりと微笑みながらその忠告を断った。

「いえ、気を利かせていただいたようですが、私にはこのような店が合っています。昔からこういった店にはよく来ていましたから」

「……そうかい。まあ、あんたがいいというのなら、俺は別に構わん。それで、注文は？」

「おすすめのメニューは何があるんですか？」

「うちのおすすめかい？ そうなるとミートパイと蜂蜜酒になるが……」

「では、それをお願いします」

注文を頼まれたレオードはすぐに料理を作り始めた。その間、手持ち無沙汰なリオーネは酒場にいる客をぐるりと見回した。

ここにいろ人々の顔に浮かんでるのはどれも笑顔。不平不満を口にしながらも、明るい表情が絶えていない。

（ここはいい雰囲気酒場ですね。しばらくはここで食事をする事にしようか）

まだ食事が来ていないにも関わらず、リオーネは店の雰囲気だけで下町での食事場を決めてしまった。

そんなとき、店内を見回していたリオーネと視線の合った一人の若い男性が、席を立ち、カウンター席の方へと歩いてきて、空いているリオーネの隣の席に座った。

「やあ、姉ちゃん。見かけない顔だけど、観光できたのか？」

男の吐き出す息は酒臭く、顔は赤らんでいる。見るからに酔っぱらっている事が分かった。しかし、そんな男の相手するのは別段珍しくないリオーネはそのまま相手に応対した。

「観光ではないですね。ですが、しばらくの間この下町に滞在する予定です」

リオーネの答えを聞いた男は口笛を吹き、少し直情的な目でリオーネの胸元を見ながら言う。

「へえ。それじゃあ、暇があったら俺と一緒に観光しないか？俺はこの町に住んで長いし、色々と案内できと思うぜ」

男の視線に気づきながら、リオーネはそのまま話を続ける。

「いいですよ。でも条件が一つあります。私と戦って参ったと言わ

せることです。それができるなら何でも言う事を聞いてあげます」

その返答に男を含めた他の客たちのテンションが一気に最高潮に高まる。

「うおおおおおつし！ 聞いたか、みんな！ 聞いたな！ 俺は今から漢になる。先に声をかけた俺の勝ちだ！」

もはや何を言いたいのかもよくわからないのだが、それでも周りの人間はそのわけの分からない男のテンションに引っぱられて、やたら盛り上がっていた。

そんな中、未だ冷静なレオードが、

「いいのか？ あんな事言っちゃって。撤回するなら今のうちだぞ」

リオーネを心配して声をかけるが、リオーネその言葉に首を振った。

「いえ、大丈夫です。それでも私鍛えていますので」

男以外の客がテーブルを動かし、店内の中央にスペースを空ける。そこにリオーネと男が移動し、対峙する。

「とりあえず、あんたに参ったと言わせればいいんだな。ルールはあるか？」

「特には。ああ、ただ気絶したら相手の負けという事でお願いします」

「ほ。よほど自信があるみたいだな。ちなみに……この争いの最中に俺の手がたまたまあんたの身体の大事な部分などに触れても事故ってことでいいよな。戦うんだから予期せず触れても仕方がないもんな！」

酔いが更に回っているのか、普段胸に秘めている男の欲望が一気に吹き出していた。ここまでいくともはや単なるセクハラである。そんな男に他の客は「うらやましいぞ、このやるおおおお」とか「てめええええ、俺と代わりやがれ！」といった声も聞こえ、そんな男たちの様子にリオーネは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「仕方ないですね。ですが、そんな事を女の私に言う以上、必要以上に痛い目にあっても文句は言わないでくださいね」

その言葉を最後にリオーネと男は無言になる。緊張感からか、周りの雑音も次第に小さくなり、消えて行く。

そして、雑音が一切なくなった瞬間、男が動き出した。

「うおおおお。俺の春よ来いっ！」

勢い良くタツクルをかまし、リオーネを押し倒しに行った男。しかし、己の身体がリオーネにぶつかると思った瞬間、相手の姿は目の前から消えていた。

「……あれ？」

間の抜けた声を上げる男だったが、すぐさまその声は苦悶の声へと成り代わった。

一瞬の間に男の背後に回ったりリオーネが、男にとって最大の急所である金的に勢いよく蹴りをかまし、激痛に悶える間もなく足を

絡めとり、男を床に倒すと腕を捻り取りそのまま押さえ込んだ。

「——ッッッ！」

激痛から声を上げて参ったと叫ぶ事もできない男は目に涙を浮かべて苦痛に耐えていた。一連の行為を見ていたギャラリーは男の様子を見て、今のがもし自分だったらという恐ろしい想像をし、顔から血の気が引いて行くのを感じていた。

そして、ようやく痛みが引いてきた男は、間髪容れずに声を上げた。

「まいった！ ごめんなさい、俺が悪かったです！」

今の痛みで酔いが冷めた男は冷静になり、リオーネに謝り続けた。

「わかりました。私の勝ちですね」

男を離し、一瞥もせずカウンター席に戻ったりオーネ。男は一緒に飲みに来ていた仲間に慰められ、自分が元いた席へと戻って行った。

「あんた中々やるな。腕もいいが、思い切りの良さもいい。男の急所をあれだけ思い切り蹴り上げる女を見たのは初めてだ」

出来上がったミートパイと蜂蜜酒を出しながら言うレオード。正直褒め言葉なのかどうなのかわからないので、リオーネはただ困った表情を浮かべるしかなかった。

「いえ、私に戦い方を教えてくれた人が、男が相手の時は迷うこと

なく急所を狙えとよく言っていたもので」

昔の話だと思うのだが、リオーネは一瞬胸の奥が痛むのを感じた。

「へえ、あなたの師匠はよっぽどえげつない奴なんだな。——おつと、自己紹介がまだだったな。俺はこの酒場の店主のレオードだ。さっきあんたに絡んできたような奴もいるが、ここは比較的雰囲気の良い場所だと思っている。よければこれからも使ってくれ」

自己紹介と一緒にさりげなく店の宣伝をするレオード。そんなレオードにリオーネは笑顔とともに、

「私はリオーネといいます。これからこの下町の警護をさせていただきますので、さっきのような人は私たちの仕事の成果になるのでむしろ歓迎です。この店も雰囲気がいいのは確かなので、これからも使わせてもらおうと思います」

自己紹介をする。

「リオーネって……まさか、あんた今度下町に派遣されるっていう騎士隊の副隊長さんか？」

予想だにしない名前に驚くレオード。しかし、そんな事を意に介さず、リオーネは淡々と答える。

「ええ。隊のメンバーはまだ来ていませんが、一足先に私だけこちらの下町にこさせていただきました。みなさん、これからよろしく願いますね」

リオーネの発言に場が静まり返る。そして、一瞬の静寂の後、酒

場からは驚愕の聲が叫びあがったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9695z/>

アルは今日も旅をする

2012年1月13日12時45分発行